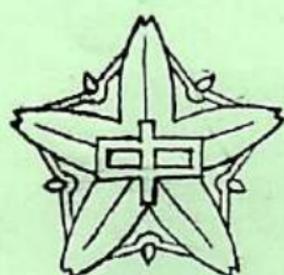


# 五稜

19 2 63

函館市立五稜中学校

生徒会



## 目 次

卷 頭 言	1
新校舎に魂を	2
この一年を省みて	3
専門部便り	4
職員寄稿	7
主 張	9
文 芸 作 文	13
詩 想	27
短 歌	30
俳 句	31
読書感想	32
部 報	35
クラスめぐり	43
一年の歩み	56
生徒看護日誌から	57
職員一覧	58

美しく健やかに……



上入学生会  
中新任先生紹介  
下立会演説会

美しく  
健康やかに

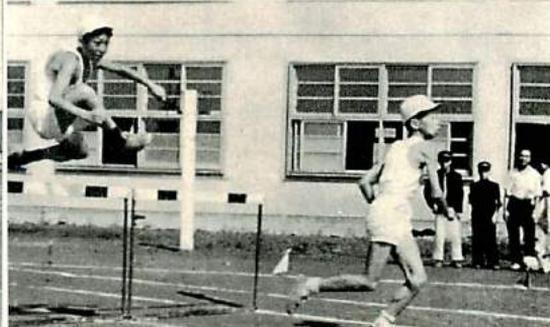


上 赤川遠足  
中 大沼・駒ヶ岳遠足  
下 写生遠足

美しく  
健康やかに



1. 2 運動会
3. 4 校内陸上競技会
5. スキー遠足



美しく健やかに……



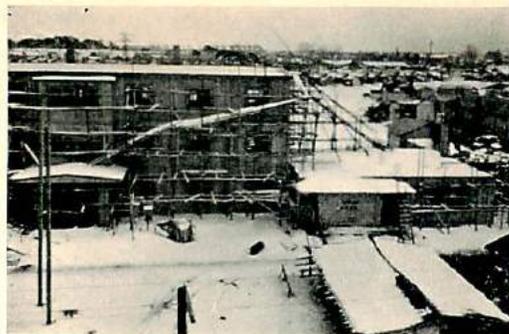
上音楽発表会  
中井論大会  
下記念植樹





上4枚文化祭展示会場  
下冬休み作品展

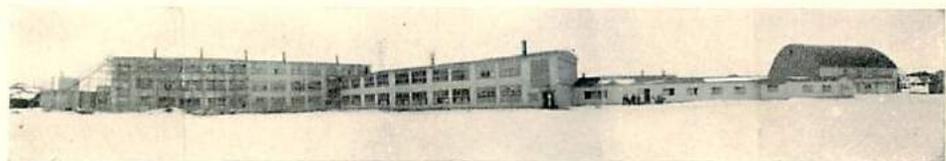
美しく  
健康やかに



第二期増築工事



新体育館内部



校舎全景



職員

こよみ

二年 岸田ヒロ子

昭和三十八年

そして一九六三年のこよみ

表紙をはぐ音

ビリビリ

厳肅な触感

少しずつ顔を出す一九六三年

ビリビリッ

まっ白な一月が出た

張り切つて躍り出す一月の一

新鮮なおい

こよみの上をうさぎが跳る

ぱりぱりの昭和三十八年

# 新校舎に魂を

校長 沼山吉之助

本年度は、未完成ではあるが、四月から新校舎で、全校生徒が心地よい学習の出来たことは何よりうれしかった。又年度途中ながら、待望の体育館も計画の約半分ではあるが完成して、三学期から存分の体育が出来たことは本当に幸いであつたと思う。

この一年間を顧みて、諸君は、本校の教育目標に合致した活動したものとと思う。然し学力において、運動において、お互いの生活態度において、あなた方それぞれ反省して真に自信を持って、ほこり得るものがあつたらうか。

第二期工事の校舎も三月中には完成されることになるし、また本年度には第三期の建築も始まり、着々と近代的新校舎が建設整備されて行くのであるから、この立派な校舎に、ふさわしい魂入れこそ、一に諸君の双肩にかかつていると言えるであらう。

本校の創設時代の諸君は、好むと好まざるとにかかわらず、五稜中学校の歴史の第一頁に足跡をのこすことになる。果して諸君が、どんな輝かしい足跡を飾ろうとおるのか、今年に期待したい。

新年度は、一年生を迎えて、愈々三ヶ学年そろつた完全形態の中学校となることでもあり、最上級生として、この一年間何を理想として頑張ろうとするのか。その自覚を打ち出すべきでなからうか。

諸君が、やがて当面することは、各人それぞれの将来の希望や、進む道は別でも、その目的を達成するためには、極めてきびしい難関があることをよく認識して、間近になつてあわてぬように、不断からこつくと、根気強く積重ねることによつて、自信をつけることを先ず第一に心掛けてほしい。

恵まれた環境を生かして、一人の落伍者も出さぬように、友愛協調の精神をお互いに發揮されて、今後続く後輩たちが、胸張つて、誇りを持って通学出来る五稜中学校にしてほしいものである。



## この一年を省みて

後期生徒会長 又 坂 常 人

一昨年、大川中学校田家分教場として発足した本校も、昨年四月、名実共に独立校となり、その名も五稜中学校として開校いたしました。本校誕生のこの一年をふりかえてみますと、本校の歴史に記念として残るべき数々の事がありました。待望の新校舎に新一年生を迎え、そして分教場から独立開校、三年生こそいせんが、すべて一人前として行動できる学校となりました。

思う存分走り回れる屋外運動場の整地、りっぱな体育館の落成、そして校舎の増築工事も今急ピッチに進められています。また学習上に必要な教材教具、運動の施設も一日毎に整ってきました。これらは、すべて先生方をはじめ、市当局や市民の方々の熱心な努力によるものと、私たちは常に感謝の心で学校生活を送ってまいりました。

一方生徒会活動についてみますと、クラブ活動の方面では、文化・運動・各部とも先輩の他校に互して、立派な成績をおさめてきました。特に中体連主催の各運動競技においては、「五稜恐るべし」との声が聞かれるまでの活躍をしました。

校内生活全般についても、生活・文化・整美・保体・厚生各部の活躍も目立ったものがありました。対外的な奉仕活動としては、歳末助け合い運動に積極的に協力をし、関係者に深く感謝され、また真駒内の恵まれぬ友達に対する同情も議決され、その作業も現在進みつつあります。

これらに反し、近頃中学生の不良化が叫ばれているおりから、お互いに自戒しつつ参りましたが、二・三他人に迷惑をかけるような者があり、先生方に御迷惑をおかけしたり、生徒会の決定を無視したりするものが、小教ではありますが、いたことは生徒会全体として、深く反省する必要があります。

きれいなこの新校舎をいつまでも大切に、そして、この校舎にふさわしく礼儀正しい、まじめな校風を作りあげることが、私達生徒会の大きな責任であります。これをなしとげるためには、生徒会全体が一九となって、努力することが必要であります。

後期生徒会長として就任はしたものの、力不足のため、何らなすところなく過ごしてきたことは、深く反省しております。次年度は全学年がそうなることになりそうですので、今までのように、二年生までよりないのだからとか、開校当初だからなどと甘えた考え方はすべて捨て、生徒会をもっと活発にしていきたいと思えます。クラブ活動はもちろん、校内外の生活を問わず、五稜中学の生徒としてのプライドをもち、先生方をはじめ市民の方々の御期待に答えるように、お互いに協力していきたいと思えます。この生徒会誌第二号発刊を機会に、本校生徒会を大きく飛躍させることを約束したいと思います。

## 専門部 便り

—この一年の歩み—

### 生活部

私達生活部は現在四十八名から成り立っています。この四十八名が生活部員としてどの様な活動をしているか、みなさんに紹介します。

生活部は専門部の中で、一番人員も多く活発に動いている機関です。生活部には看護という大事な仕事があります。

看護の仕事は、ある週目標にもとづいてみんなの生活態度をつねに注意しているのです、あまりわりのよい仕事ではありません。

各クラスに生活委員は四人ずつおりますが、男女交互に一週間ずつの当番制になっているので、大きくわけると四つの班からなっています。自分の勤務にあたった週は、毎朝八時十五分までに登校し各休み時間を巡回して歩きます。特に冬は寒さが身にしみて、廊下に立っていられなくなり、つい教室にもぐりこんでしまいたくありません。このような時ほど「看護はほんとうにつらくていやだな」と思う心はみな同じだと思います。……

こうして、その週の土曜日には引きつぎを行ないます。ここで一週間の反省と来週の目標をきめます。しかし、ここで私がかがつかずことは、いつも同じような目標だということです。例をあげてみると、「廊下でさわがない」とか「遅刻をしない」というようなものが連続あげられることもあります。でも廊下の使用はりっぱな運動場ができたせいとか、いくぶん良くなったと思います。このほかにも良くなっているものはありますが結論的には、まだみんなが目標を守っていないことになります。

これからは、看護とみんなが協力し合って、少しでも良い学校生活がおくれる様に、お互いに努力しなければなりませんと思います。又私達看護も次のようなことを改めていきたいと思えます。

第一に集合時間には必ずその班全員が集まっていなければならぬこと。第二にもう少し私たちは積極的に自分の勤務をつとめなければならぬこと。第三に自信を持って注意すること。このほかにもまだまだありますが、だいたいこれ位を守っていきたいと思えます。最後に私たち生活部全員がいつそみなさんの期待にそうようつとめていきたいと思えます。  
(水島 満枝)

### 文化部

文化部は昨年の四月、各クラスから選ばれた委員二十四名と指導して下さる数人の先生方と共に誕生しました。

まだ設備も整わないまま、部員を放送部・図書部の二つに分けて始めることになりました。

最初は図書部といっても名ばかりで別にすることはありませんでした。放送部でも小さな放送機や、マイクを取り付けただけのものですが、私達部員はとも張り切っていました。

はじめのうちは、張り切り過ぎて失敗ばかりして、恥ずかしかったことも、たびたびありました。そのうちに、第二回運動会が行なわれ、選ばれた三名が競技を説明し、男子三名が先生の手伝いをして、運動会での文化部の仕事はどうかはたされました。

二学期になり、図書の戸だなにも、わずかながら本が入り、音楽室のすみを借りて、図書部の活躍が始まりました。全員が一しよには出来ないで、各クラスの文化委員が中心となり、窪田先生の御指導を受けて、本は貸し出されました。一週交代のために、順番が来るまで一ヶ月の間がありました。それでも借りる人はどんどんふえていって、一度に三冊も借りる人さえいました。

また、本がなくなったりすることは一度もありませんでしたが、音楽の本の後に残っていたソノシートがなくなったりしたこともありました。表紙がいたんだり、返す期日が過ぎてても返しに来なかったりして、私達を不安にしたこともありました。

文化祭が終わり、二学期も終わりに近づいた頃、後期委員選挙が行なわれました。後期文化委員は、前期の人とあまり変わりがありませんでした。二学期には新しい放送機が取り付けられ、放送もやりやすくなりました。

それに前のような失敗もあまりなく、放送の担当石塚先生からの注意も少なくなりました。こうして一人一人の努力もみのつてきました。昨年十一月に二年生の女子の放送部員が「音の修学旅行」という題で、函館の町の説明を録音して、西谷先生によって館中学校へ送られました。私達にとっては他の学校へテープを送ることは初めてのことでした。暗くなるまで練習した結果、出来上がったものですが「よくできたよ。」とほめられた時は、ほんとうにうれしく思いました。また後期には図書戸だなも満員になって、国語辞典を職員室の方に移して、新しい本を入れたりしました。新しい本が入ると先ず最初にする事は、ラベルはりの仕事です。

これは女子の部員がいつもやっていますが、はじめ「女子だけでやるのが不公平だ。」と言って帰ってしまう人さえいました。が文化部の仕事は、女子、男子にかかわらず部員がやるべきことなので、最近ではみんながやっていくようになりました。また放送部員で「街頭録音をしたい。」とか、「各学級で作った放送劇を級ごとでやってみよう。」という人がいて、やりたいことはたくさんあります。

このような部員の希望していることは、まだまだかなえられそうもありませんが、それまでに他の学校とのテープの交換などは、どしどしやってみようと思っています。そして図書室・放送室完成ま

でに、この文化部も明かるい、よい部として完成させていきたいと思っております。  
(奥田志満子)

## 厚生部

僕達は厚生委員に任命され、はじめはどんな仕事をするのか全然わからず、不安な気持ちであったが、係の野々村先生が親切に教えて下さったのでこの頃は大人なれてきた。厚生部の主な仕事は、毎朝クラスの生徒から希望をとり、昼食用のパンと牛乳の注文をまとめて、先生にお願いすることである。部員は毎朝早目に学校へ来て、申し込みのあったパンの種類や飲物などの注文をまとめて、一時間目の授業が終わったら、職員室の前にはってある紙に書く事になっている。それを先生がパン屋さんに注文してくれる。パンが届いた頃、部員の人達は集ったお金を持って行って品物を受け取ることになっているが、時には金の計算が合わなくなることがある。そんな時には、先生がお金を出して合わせてくれるが、先生は「お前達はこのような色々の仕事の仕方をおぼえるだけでよい。もしお金が足りなくなったら、いつでも言いに来い。」と言って下さるが、やはり部員として仕事をまかせられている以上は、自分達の責任においても、そのようなことが度々あってはならないと思う。僕達部員にとって非常に困るのは、朝僕達にパンを頼まず昼の食事の時、自分勝手にパンを買いに行く人がいることである。新年度からはそういうことのないようにみんな協力してほしいと思う。

近頃は仕事の方の要領のみこめ、会計の方も正確にできるようになってよかったと思う。何事でもはじめはよくできないが、自分で一生懸命に努力をすることでできるものである。厚生部の仕事は、今はパンの注文の仕事だけであるが、僕達の体が健康に成長するため食物のことをあつかっているから、衛生の面においても十分気をつけて、責任を持ってやってみようと思う。そしてこれ

からも部員の人達が協力し合って皆なのために役に立つようになり  
たいと思う。(上杉 秀一)

## 保健体育部

各学級の体育部員が一・〇で顔を合わせてから、はや一年になろうとしてゐる。ただ保健体育部といへば、皆さんはきつと「おもしろいだろうな、いいなあ。」と思うだろう。僕も實際をう思つてゐた。しかし各部を通じて一番人知れぬ苦勞をするのがこの部だといふこともわかつた。僕達のやつた仕事の、二・三を上げてみると、まず授業の体育の時間の準備である。男子は男子で、女子は女子でクラスの責任者である。といへばおかげだが、悪いところがあればすぐに「体育委員……」とくる。これは当然だろうけれども、一人で大勢の人を体育の授業の体勢に整えることは容易なことではない。次に運動会、その他校内陸上競技大会・ソフトボール・遠足と運動関係の行事でみんなが楽しい時などでも、仕事のため大きな声を出して整理したり、手伝いに努めたりして、最も楽しく行事ができるように心がけていなくてはならない。

一日の学校生活で運動と全く無関係ということはありえないだろう。僕達はその日常の運動で生徒諸君の先頭に立ち、体育委員という立場から模範的行動するように心がけなければならない。これはちつとやそつとではつとまらないと思つた。しかし、阿部、小川両先生はじめ、各先生方の御指導があつて、僕達もどうやら一年という長い間を無事やり通してきた。これでいかに保健体育部が大事であることが皆さんもおわかりいただけると思う。今までつらいことばかりならべたが、もちろん楽しいこともある。運動の好きな人なら体育関係の手伝いはおもしろいものである。スキー遠足の時の竹ざおを持っていく時、電車の屋根につかえて困つたこと、体力テストの記録の細かい計算などは、つらかつたといへばつらかつたが、

よい思い出にもなつた。最後に私達の御指導に当られた阿部、小川両先生には心から感謝し、結びとする。(小田 晴久)

## 整 美 部

後期の整美委員に任命されたのは、生徒会役員選挙後の十月でした。それまで整美部の仕事については、あまり関心を持っていませんでした。委員になつてはじめて任務の重大さを強く感じました。このきれいな校舎をいつまでも大切に、教室の備品や用具をきちんと整え、美しい環境の中でみんなが楽しく勉強できるようにすることが、私たちに与えられた任務です。具体的な仕事としては、大掃除の組み分け、用具の配分、運搬等あまり面白くない忙がしい仕事です。その他教室内の用具の保管にも常に心を配つていなければなりません。

整美部は月一回反省会を開いて、前に上げたようなことがらについて話し合いを行ないます。一、二の心ない人のために、用具がこわれたり、校舎が汚れたりすることがあるのは何といつても残念なことです。部員がいちばん気をつかつていることは、何と云つても、どうしたらいつまでもこの校舎をきれいに保つかということです。土足や、落書きなどは絶対になくするようにするために、お互に勇氣を持たなければなりません。もしそういう人がいたら恐れず注意してやること。各学級でもつと活発に話し合いをすること。目についたらすぐ消したり、ふいたりすること。などが討議されました。

環境は人の心を支配するとよく言われています。私たちが美しい校舎で、きれいな正しい心を育てるために協力し合つていきたいと思ひます。整美部だけがいくら一生懸命になつても、決してよくありません。ひとりのまちがった人がいるとみんなの苦心は水の泡です。全員一つの心になつて本校をりっぱにしていくように御協力をお願いいたします。(小山 京子)

## 視察旅行記

井 上 豊

一月十日午後三時上野へ到着して間もなく、明日からの予定の学校参観について、東京教育庁へ連絡すると、幸いにも道教育委員会に居られた横田氏が指導部管理課に居られて視察についての目的を話すと、次の学校を紹介してくれた。渋谷区の上原中学校は芸術大が依頼をうけて校舎の各教室の色彩について研究し実施されたもので、特に理科教室その他特別教室の設計には特色があること。太田区立大森七中は第三期増改築工事が完成し、産業教育の指定校となつているとのことであつた。

一月十一日省線代々上木原の駅を下車して、小田急線添いに五分左手の道ぞいに三分行くと校舎が見えて来た。刑部教頭の案内で校舎参観。此の学校は普通学級二六と特殊学級、明星学園六学級編成で、理科教室は理振法基準によつて充実する外、第一理科室(物・化)第二理科室(動植物)との間に理科準備室があつて、各実験机は水道・ガス・コンセントの配置がしてあり、机上の一部ステンレス蓋を取ると流しが出る仕組である。又映写のため、背面の掲示板を左右に開くとスクリーンになるよう工夫されている。鉄筋四階建のこの校舎が出来る迄急造のパイプ組立の使用した仮教室が残つて居り、その先にはプールが設けられていた。

十二日山手線より京浜東北線にのりかえ蒲田でまた池上線に乗り久ヶ原で下車、昨年五月まで使用したと言ふ古い校舎が残つて居り新築完成の建物の対比は往時の歴史的経過を物語つて居る。佐藤教頭の案内により先ず通されたのは木工・金工の準備室で両側に木工室と金工室がある。設計及び設備は大阪有数のものを研究して作つ

た産業教育指定校だけあつて、技術関係に一七〇万円、調理被服関係に一三〇万円合計三〇〇万円かけたものである。なお三十八年度末までに一二〇万円見込んで居るとのこと、申し分のない充実さである。調理実習室にはし型キッチン、直線型キッチン、生徒用調理台(取外し式棚付)各種用意されており、試食室との境はアコーディオン屏がついている。外に被服室及び準備室がある。進路指導部主任の中村先生より「進路の手引」(就職篇)と言ふ一〇〇頁程の研究部が作った印刷物をいたゞく。卒業生が一番多く就職している工場の見学を頼つたところ、心よく片岡電気とソニーの会社へ見学の連絡を取つてくれた。

午後久ヶ原の次の雪ヶ谷駅下車、片岡電気はすぐ判つた。産業スパイ等のこともあつて、普通は見学させないが紹介のおかげで総務部長の案内で、テレビのチャンネルのチューナー製作工程、山間遊地でもこれを装置すれば充分視聴出来るコンパクターの製作工程を見学。最近大きく横浜にも工場を持つという発展ぶりである。日本人の特に手先の器用な面を活かし、この様な細かい作業は丁度うつつの海外発展の輸出産業となるとのことであつた。

続いて池上線終点の五反田で下車、ソニー株式会社を見学する。さすがにテレビ等で出るマンモス工場である。見学案内のビジタース係だけでも六・七人はいる。マイクテレビ、テーブコーダー、トランジスタラジオの組立工程等見学するのに一時間半はかゝつた。昭和二十一年一九万円でスタートした会社が現在では資本金二億円にまで発展した大工場である。ソニーの従業員の平均年令は二十一才余と言われるから働く人々は如何に若いかが分る。技術革新による日本の開拓される躍進の一つの道を見て参考となつた。

十五日伊豆半島の伊勢エビで有名な河津海岸川端康成の「伊豆の踊り子」で知られる天城山懐の溪流をながめ、伊豆南端の石廊崎燈台附近の波濤によつて侵蝕されたリアス式海岸の景観を見る。

# ノサツブ岬まで

西谷 富士雄



昨年の十月帯広市で開催された全道放送教育研究会に参加した後、私は道東一の新興都市釧路の視察を兼ね、日本の最東端で夜の明けるのが一番早いノサツブ岬を訪ねることにした。

## ノサツブ岬

その朝霜で真白な釧路駅ホームから客車を改造したディゼルカーに乗車。釧路川の鉄橋を通過すると根釧原野と呼ばれる紅葉した湿地帯である。このあたりから厚岸の海岸までの約四十キロは、千葉の軍の学校を卒業して赴任した部隊と対戦車陣地を構築した地帯で二十年前の悪夢のあとだ。よく気をつけて見ると草むらの中にボツリと取り残されたトーチカの残骸が数ヶ所横たわっているのが目につき、いいしれないものが胸をつく。

列車で約三時間進むと車窓から海岸のきりたった落石岬が見えてくる。この辺からノサツブまで樹木らしいものは全く見られぬゆるやかな起伏の平原になって続いている。窓の右に広々とした太平洋が、左にはるか遠く根室海峡のぞまれる。ようやく列車はさいはての駅根室で足をとめる。終戦真近空襲をうけてまる裸になった町も今は一応立派に復興しており、当時を覚えている私はこの目を疑う程であった。ここから野付水道をへだててクナシリ島のケラムイ岬がうっすらとみえる。当地の漁師は日に数回これを眺めて昔を回想するのだそうだ。

私はいよいよ最後の難コースにかかる。駅前からノサツブ燈台行の定期バスに乗る。これから貝殻島のみえる昆布船だ捕の悲劇を物語るノサツブに向かうのだと思うと何かしら胸の高なりを覚える。巾約四キロ、長さ約三十キロの根室半島をたどる道路は悪くお話しにならない。膝にカメラと録音機をギツシリおさえつけ、体を座席に保つのがせい一ばいであった。右前方、荒波の太平洋上には板切りが浮ぶように真平らなユリ島とアキユリ島が見える。左側は小高い丘状になっている草原は彼方で空と一緒に続くと続くと。道の両側には真赤な実をつけたハマナスの灌木が生えており、当地の人はこれをつんでジャムに加工し冬の楽しみに蓄えるのだそうだ。

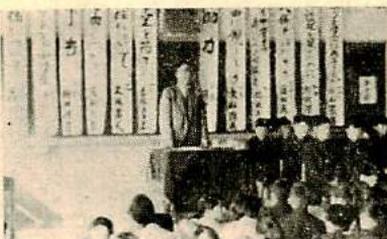
この殺人的バスとも一応別れを告げてゴヨウマイ小中学校の門をくぐる。校長の近藤先生は遠来の客と心よく迎えてくれた。私は放送記者よろしくマイクをすえて話したすと、職員室の視線が一齊に集まる。思わず顔をハンカチで拭う。体の方もビツシヨリになる。早々にマイクをしまい込んで宿直室に移って次の取材に入る。それは七月末のNHKテレビ「時の表情―貝殻島をみつめて」に登場した中学二年の石川定美君と中村千恵子さんにインタビューするためであった。石川君は兄を中村さんは父をソ連に連れ去られ、昆布盛漁期には午前二時に起床して働いているそうである。

食後石川君に案内されてノサツブに行く。ゴヨウマイ海峡の汐風はつめたく波は非常に荒い。肉眼で見える貝殻島まで三・七キロ、島の先に南に斜いた褐色の燈台、今はソ連の管理下にある。その右にアキユリ島、左に水晶島が浮び、双眼鏡でみるとソ連の兵舎と監視所がはつきり見られる。この魔の海の中央に事実上の国境線がしかれていたのである。この海で二百余隻の昆布船がソ連監視船に追われ、過去六年間に六十隻・百二十五人の人がつれ去られたこと等の説明をきき、日ソの国境という現実を心くもらせながら秋深きノサツブ岬を後にした。

主 張

名曲に親しもう

一年B組 大石 哲夫



ある日、兄といっしょに、レコードをかけて、音楽を楽しんでいた時のことでした。映画音楽に耳を傾けていた兄が、とっぜん「モーツァルトやベートーベン、または、チャイコフスキーなどの有名な作曲家の作った曲を、おまえは、どれだけ知ってるか？」と聞かれました。しかし、私には、さっぱりわかりませんでした。そして、兄や母に、「流行歌ばかり歌っているからだ。」と、こごとをもらってしまいました。

実際、私たちの生活の中には、流行歌があふれています。町の雑踏の中で、商店の拡声機から流れ出てくる音楽は、流行歌ばかりです。勉強のあいまに、テレビのスイッチを入れると、流れ出てくる音楽も流行歌です。よちよち歩きの幼い子供までが、まわらぬ口で歌っています。このように、私たちの生活には流行歌があふれています。

しかし、この中でいくくの人々が、どれだけ流行歌の意味や、内容を理解して歌っているのでしょうか。ただ、意味も内容も、理解しないままに歌っているだけです。そして、まちがった生活態度や、誤った考えの方へ入っている人が、少なくありません。

私達中学生には、中学生らしい歌があるはずで

幼稚園のころは童謡に親しみ、小学生のころには、素直に、学校で習った歌を歌ったように、私達中学生には、中学生の歌があるはずで

音楽の時間に習った、あの歌、あの曲を、もう一度歌ってみて下さい。また、有名な作曲家の作った曲を、もう一度聞いてみて下さい。二回目は一回目より、四回目は三回目以上に親しみがわいてくるはずで

そうすることに

よって、私達中学生は、流行歌を離れ、本当の音楽というものを理解し、また、音楽のよさを味わうことができるだろうと思います。流行歌はおとなの歌であり、おとなの世界で

私達中学生は、こういう音楽にまよわされないようになる時こそりっぱな中学生となり、私も兄の質問に、まどわず、答えることが出来るでしょう……。



## スポーツと学習は両立するか

一年C組 小 西 憲 男

皆さん、スポーツと学習は両立するか、これは私たち中学生にとって非常に大きな問題です。とくに、小学生の時になかった新しい問題だけに、真剣に考えなければなりません。そこで、私はクラスの意見を代表して発表したいと思います。

私たちは、非常に運動が好きです。英語や数学の時間に小さくなっている人でも、体育の時間はのびのびと運動しています。私たちは、中学生になって、まだ半年を過ぎたばかりですが、運動会、校内競技大会、クラブ活動など、そうとう多く練習してきました。しかし、私たちは中学生である以上勉強もしなくてはなりません。クラブに入って練習していると、どうしても、学習時間が少なくなります。その結果、成績が下がるということがおこります。お父さんや、お母さんにはしかられ、先生にはきつく注意されます。でも、私たちは運動が好きです。スポーツも、学習することに劣らない大切なことを身につけることができます。私たちの体は動かすことにより発達します。もし、我々から運動を完全に取りざり、勉強だけをつづけていたならば、どうなるか想像してみてください。手や足はもやしのようになり、頭は今の何倍も大きくなり、自分の体を動かすことができなくなるのではないのでしょうか。科学が著しく発達すると、こういうことがおこらないとは誰が断言できますでしょうか。

それではスポーツと学習は両立させなければならないと思います。なぜならば、いかに勉強して成績を上げ、天才といわれるような人でも、健康でなく、みんなと生活できないような人は、立派な人間とはいえないのではないのでしょうか。自分から進んで運動することにより、立派な体・なにごとも努力する精神・みんな

となかよくできる心などを養い、すぐれた社会人になろうではありませんか。

それでは、学習時間が不足するというのをどのように解決したらよいのでしょうか。ここで、今までの学校生活をふりかえってみましょう。授業時間を見ると、先生の話を耳をかたむけ、先生の目と目を直線に結んでいる生徒は何人いるのでしょうか。自分の理解できないことを質問する人は何人いるのでしょうか。授業時間に真剣に努力することこそ両立させる最も大切なことではないのでしょうか。また家に帰って勉強するときに、全神経を傾けてしているのでしょうか、いたずらをしたり、テレビを見たり、いやいやながら学習しているのではないのでしょうか。それでは、次のようにしたならば、両立すると思います。

すなわち、学習計画を立て、どんなことがあっても実行しようと努力すること。もう一つは運動することによって養われた強い精神力により、自分が十分理解するまで努力し、授業時間には指導されたことが理解できなかったら、何度でも質問し、その時間内のことは、その時間内に必ず理解するということです。スポーツすることにより、気分をそう快にし、頭の働きを最高にして学習すると、短い時間で最大の効果をあげられると思います。本校のクラブの現状をみて下さい。テストで立派な成績を上げ、クラブ活動でも活躍している生徒がたくさんおられます。学習とスポーツを両立させるためには、まだまだ多くの問題がありますが、努力さえすれば十分両立できるのではないのでしょうか。五稜中学校のため、自分のためみんな努力しようではありませんか。



## 幸福について

二年E組 森 孝 男

幸福とは一体なんであろうか。フランクは「幸福は欲望を減らすか、持物をふやせばよい。」—又、パスカルは「最大の幸福を完成しようとするには、最小の悪をも行なつてはいけない。」といっています。

では、日頃僕の考えている幸福について述べてみようと思います。まず幸福は僕達の生活の中に考えられなければならないと思います。つまり生きていないと幸福は感じられないのであって、生を離れては幸福は絶対にはないと思います。

しかし、その生き方に問題があるのです。生きていていいなあと思ひ、人生は美しい、楽しいと感じさせる生活が、幸福なのです。生物は生存しています。最も人間に近いサルも、又下等なミドリムシも、鳥も、魚も皆生きています。しかし、彼等は毎日エサを求めてさまよい、眠くなると寝る。ただ、自然の法則に従つて生きています。従つてただ生きていくというだけで前向きの次勢がないのです。進歩がないのです。単なる生存には幸も不幸もないのです。

では、人間は一体どうであるか。人間は絶えずより良く生きていこうとし、生活の向上、文化の発展、完成、などを求めています。

「人間は考える葦」とパスカルは言っています。動物と違つていゝる点はこれです。万物の霊長たる所以はこれです。人間はいつも考え、常に不足を見つけてその場に安心していません。最も身近な僕達の中にも、小学校教育だけでは満足できず中学校、高校、大学さらに専門的に研究を続けて学位を得て、りっぱな学者になろうとしている諸君もいることでしょう。この様に目標にはきりがありません。一つの目標に達すると又、それ以上の目標を求め

る様になるのです。

しかし、人間にはそれを実現するのに限度があるのです。この様に「なりたい」この様で「ありたい」と、思う事が不幸なのです。どこまでも幸福を求めたいと思うのは人間の本性であつて不幸なのです。それでは人間は幸福になれないのでしょうか？なれます。それは自分の環境や能力に合せて「こうしたい」「ああしたい」と云う欲望を制限することです。昔の人はこれを「知足、安分」たることを知る。つまり、足りないことを知つていながら、我慢満足を感ずると云つています。不幸は不足の感じから生まれる。それならば、何も初めから「なりたい」「ありたい」と求めなければ、何もいらぬし、何の不足も感じないし、不幸も知らない。僕達はこの様な心構えでいれば、無一物の乞食生活にもたえることができるわけである。しかし皆さん、ここでまぢがつてはいけません。我慢することを唯一の美德とし不幸を感じないことを、そのまま幸福として、何も求めず、単なる生存に過ぎないとするならば、それじゃ鳥や獣と全く同じです。いけません。

結論を言ひましょう、僕の言ひたい幸福というのは、文化の発展を助けながら、生活の向上をいつも望み、そこでその目標に向かつて一生懸命努力して完成した時、精一杯心から思う存分喜び、満足し、自信を持ち、ここで幸福感を感じるのです。しかしここで足踏みしないで又、次の目標を日ざし元気、勇気を出して突進していくことです。

最後にカール、ブツセの詩で終わりたいと思います。幸福を望んでいる人が、ある人から山の向こうに幸福があると聞かされ、行つて見たらなかった。泣き／＼帰つて来たら、又次の人の言うことには、山のもう一つ向こうの山にあると言う。行つてみたらなかった。つまり幸福というのは、あちこちにはあつていない

ではない。自分が築くものなのです。といった詩です。

山のあなたの空遠く

幸いすむと人のいう

ああ、我人とめいきて

涙さしぐみ、帰りきぬ

山のあなたのなほ遠く

幸、すむと人のいう、

## 責任を果たそう

二年F組 藤 田 真 司

このごろの若い者は無責任だ、と言われているのをよく聞きます。これは日本のことだけをいっているのか、あるいは世界的傾向なのか、私にはよくわかりませんが、新聞などを見ると、確かにそうであると思わないわけにはいきません。毎日の新聞の社会面をにぎわしている、いろいろな犯罪や、交通事故などが比較的年の若い者に多いことは、これを実証していると思います。このことは私たち若い者にとって、たいへん悲しいことであると同時に、よくよく考えてみなければならぬと思います。毎日の私たちの学校生活を反省してみても、ずいぶん無責任な行動があるように思います。私などもついいうっかりして先生方から注意をうけてはつとすることがあります。この間、それは九月のことですが、私たちバレー部が、中体連主催の試合に出場するので、放課後毎日熱心に練習していた時のことでした。あいにくその日は天気が悪く、ほかの学校の屋体を借りて練習することになっていました。授業が済んだので、一刻も早く練習に行こうと思って急いで行ってみたら、先生も見えられ、メンバーも案外早くそろっていました。しかし、かんじんな練習のための道具を持って

来た者が、一人もいなかったのです。もちろん、私もその中の一人でした。それからあわててグループの三人で、雨の中を本校まで道具を取りに走らなければなりません。せっかく、ほかの学校の屋体を借りてまで練習しなければならぬという時に、何というむだなことでしょう。これは私をふくめたバレー部全員が、自分の責任を果たさなかつたためのできごとでした。これと同じようなことが、私たちの毎日の学校生活に、数多く見うけられます。毎日の日直や掃除当番にしても、自分のしなければならぬことをしないで、他人に迷惑をかけているというようなことが毎日のように目につきます。私などもたいぎだ、めんどろくさいという考えが先にたつて、ついついなまけてしまうことがあります。このように、一人一人が自分に与えられた責任を果たさないと、どういうことになるでしょう。たった一人の人のちよつとした不注意から、数多くの尊い人命が失われるという結果にもなりかねません。また自分一人の信用を失うばかりか、自分の勤めている店や、会社や、役所全体の信用をも失う結果になりかねません。みんな一人一人が自分個人として与えられた仕事を、きちんとやっていくように心がけるならば、私たちの学校生活はもっともつと明るく、楽しいものになってくるでしょう。みなさん、私たち一人一人が自分自身というものを、今こでもう一度よくよく考えてみようではありませんか。そして自分の身のまわりから身につけたいものです。そして、名門五稜の校風を作る第一回生として、しっかりとがんばろうではありませんか。





## 二年生になって

二年C組

倉橋 恵子

二年生になって私は、大川中学校から五稜中学校へ転校した。四月二日に母とこの学校へ来た時、ちょうど開校日だった。

「二年C組菅原先生です。」と言われた時、わたしは「二年C組ってどんな組だろう。」と考えてみた。「明るい学級だろうか、それとも反対だろうか。」と、考えていたら、先生に教室へ案内された。階段を上って行く時「新しい校舎っていいなあ。」と思った。大川は特別だけどやっぱり思い出されてきた。みんなとやらんで通し教室へ入った時、沢山の先生方や教育委員の人達などが、わたしのそろうのを待っていてくださった。目をずつと配ってみたが、ひとりも知っている人がいなかった。ちよつと心細さを感じた。

式が始まり開校式にあたっていろいろな方がお話しをしてくださいました。わたしには、そんなに長時間でないのにそうとうに長く感じられた。教室へ帰ってめいめいの机とイスを運ぶ時、だれも手伝わってくれず、どうしようかと思つた時もあった。わたしのほかにも同じ思いをした人が幾人かいたことだろう。

やつとおちついて教室の中を見たら、なにかも新しいものだった。机といすはそんなでもなかったが、床や壁は大川とは対照的だ。「先生はまだ若いなあ。」と感じたが後で三十一歳と聞いておどろいた。

友達顔をくると見たら、ひとりだけ知っている人がいた。おさげで目の大きい家の向いの馬場和子さんだ。そばへ行つて話しようかと思つて、のどまで声が出たが、やっぱりその気もなくなつた。帰る時も「五稜中学校の二年C組で最上級生」そういう実感もとめられなかった。

五月になれば楽しい遠足があるし、また六月になれば運動会もある。そういう機会を利用して多くの友達と仲よくなろうと思つた。でも遠足、運動会を待たずに、一日、二日と日がたつてひとりずつ友達ができて、今では沢山の友達ができた。二年生という大事な学年を有効に過ごそうと思つている。

## 運動会

二年D組 神崎 逸子

いつもより早く床の中に入った。明日は運動会なのである。目をつぶろうと思つてもなかなか眠れない。みんなの後から大きいからだを鈍らせて走るのが、目に浮んできて心配でたまらない。下の方で、テレビの音が、普通よりも、うるさく聞こえた。暗いへやの中で考えながら、いつのまにか眠つた。

朝六時に目がさめた。下に行くと母が弁当の用意にせいで出していた。私は顔を洗い、御飯を食べた。自分ではふだんの私に変わらないと思うが、御飯のどに通らなかつた。「落ち着いて食べたら。」と母が言った。私の態度が母にそう見えたのかしら。七時半ごろ家を出た。



学校につくとみんな席について自由な行動をしていた。

皆の顔が自信に満ちているように見えてくる。開会式が終わり、私の一番初めの競技「名所旧蹟」が始めた。ついに私たちの番がきた。おしゃべりがビタツと止まつた。胸がドキンドキン音をたてている。「用意」「ドン」ピストルが勢いよく鳴った。びくつとして足が踏み出せなかった。私は皆んなの後を走った。カアドを合わせてゴールに着いた。順位には入らないが、私の後から来る人もいた。次ぎは百米だ。学校の行事で一番嫌いなのが運動会。そして運動会が一番嫌いなのが百米競走だ。その上ころんだりしたらと不安の心が積重なるよにわいてきた。ピストルが鳴り皆一せいに走り出した。途中でだれかがころんだらしい。二・三人の足が遅くなった。私はつかからなかったの、ゴール前では私の後に二人いた。ゴール直前で力をぬいた二人を抜いた。早く言えば私の後に四人いるのだ。もちろんころんだ人が出ただけれど。

回が重なるたびに私たちの組の合計点が発表されていく。いつしか時間も過ぎお弁当の時がきた。昼のプログラムはフォークダンスから始まった。三番目は私たちのダンスだ。母が見ていると思つて元気に踊った。競技も時間のたつことに、進んでいった。私たちの組全体で出たメデシンボールは一位になった。その他の競技も私たちの組は二位をだいたいぶ離す良い点だった。私自身にも活躍はしなかったけれど、勝つたこととはとっても嬉しかった。

皆で最後写真を写した。もちろん正面に優勝カップを前にして。私は帰り道、自分自身はだめだったが？組の人もこのような良い点を取るとはだれも予想しなかったはずだ。

私みたいに「できないのなものしかたがない。」は捨てなければいけない。「皆のために頑張ろう。」と思う組の人たちの熱意で優勝したのである。私はこの運動で、何かを教えられたような気がした。

## 仁山遠足

二年D組 富山恵子

新鮮な緑がしみこむような山道を、私たちは歩き続ける。もう大声でさわぐ人もいない。ハアハアいいながら、力のある限り前へ進む。「もうだめね。」と、友が言った。「もうわりね。」と、わたしも思った。後の方で「これだったら学校で勉強していた方がよかつた。」と、言っている声が聞こえる。

もう髪は洗つたかのようにぬれているし、ズボンもシャツも汗で体に着いて気持ちが悪い。わたしはハンカチを出して顔をふく。ふいてもふいても汗は休みなく出てくる。心臓が耳もとにあるかのように、ドキドキと今にも破裂しそうな、ものすごい音をたてている。さきほどから、ことを忘れたかのように、だれも何も言わない。駒ヶ岳が見えても、田や畑が見えても、誰も何も言わない。「もうすこしだぞ。」と、だれかが大声で言った。元気づいた私たちは歩くのが早目になった。遅くなつたり、早くなつたり、休んだりして、まるでこわれた時計のように、私たちは無言で歩く。やつと坂道がゆるやかになった。日陰をみつめてシヨルダーを置いて休んだ。冷たい水がのどを通る。おいしい。「あなたの顔真赤よ。」と、友が言った。ほおがカツカツとほてっているのが感じられる。またハンカチを顔にあてて歩きます。どこからか気持ちよい風が吹いてくる。ここで道が二つになっている。一つは急だが登るのすぐ頂上。もう一つはゆるやかだが、ぐるりと回らなければならぬ。

私たちは急な方を選んだ。またそこを登りはじめた。足が思うように動かないし痛い。「同じ一年生なのに私だけがへたばつてはいけない。」と、思い一生懸命に登った。

上の方で「早く登ってきなさいよ。」と、友の声が聞こえた。私たちは、みんなにまけないよう、歯をくいしばって登った。やつと

のことで頂上にたどり着いた。冷たい風が、私たちのほおを吹きよせる。「気持ちがいいわ。」と、みんな口々に言う。なにも言わなかったみんなが……。

下からはまだたくさんの方が、汗をふきふき登ってくる。「がんばって、もうすぐよ。」と、言わずにはいられなかった。新鮮な空気を胸いっぱい吸った。私たちは、先生の注意もそこそこに、おにぎりをはおぼった……。中学生になってから二回目の遠足である。

## 遅刻

二年F組 村岡千鶴子

夜遅く寝たせいとか、朝ねぼろした。ご飯も食べずに外へ出て、あたりを見まわすと、中学生の姿は見あたらない。「遅刻かな。」と思えば不安な気持ちで歩く。「こんな気持ちになるのなら、夕べもつと早くねればよかった。」しかし今となっては、後の祭りであるから、とにかく歩く。そうしている間に、友達にあらう。急に「ホッ。」とした気持ちになり、苦しみを分け合ったような気がしてくる。

今ごろ学校へ行くのが自分一人でない。そう感じるからであらうか。少しではあるが気持ちが落ち着くものである。学校につくとすでにベルは鳴ってしまつて、看護の生徒が玄関で待っていた。しかたないと思つて玄関の中へ入る。クラスと名前を聞かれる。なんともいえないいやな気持ちだ。静かな廊下を通つて、三階の教室へ行く。みんな自習をしている。そこへかばんをさげて入って行くのは、自分にとって一番いやなことだ。

戸をあけると、いやでもみんなが見る。別にみんなは、見るつもりがなくても、戸をあける者がいれば見るのは当然であらう。そこを通つて席につく。友達から「どうしたの、ねぼろ。」と聞かれる。もし入って来たとき、先生がいたならどんな気持ちになつたことだ

らう。先生は、まず「どうした。ねぼろか。」とたずねるだろう。すると私は、「……いいえ、あの……。」とほんとのことは、いえないだろう。考えただけでいやになる。そして、「明日は、ぜったい遅れて来まい。」そう思つても、次の日になるとみごとに遅刻する。

小学校の時は、そうではなかった。人さきにと行つたものだ。中学になるとだんだん遅刻するようになった。あまりのんびりすぎるのだろうか。これからは遅刻をしないよう努めて、早く起きよう。

## しいちゃん

二年F組 及川由美子

私には、しいちゃんというお姉さんがいます。といつても私の本当のお姉さんではありません。ペンフレンドです。兵庫県の人で、名前は藤井静子さんといい、現在高校二年生です。私としいちゃん知り合つたのは、今から三年前で私が小学校の五年生の時です。学校から帰ってきたら、のんちゃんが「ゆっちゃん、藤井さんから手紙きているよ。」と私にいいました。私は、前に同じ組に藤井さんという人がいたから、その人から来たかと思ひ、さし出し人の名前を見たら、全然知らない人なのでびっくりしました。

しいちゃんが私を知つたきっかけは、私が五年生の時にとつていた雑誌の懸賞で一等になり、雑誌に私の住所と、名前が出たからです。しいちゃんから最初に手紙のきたのが四月十日です。それ以来私としいちゃんの文通がはじまりました。その時、しいちゃんは中学二年生でした。お互いに自分の地方のこと、家族、趣味のことなどを教え合つていると、なんだか本当の姉妹のような気がし、今では二人で、姉妹のことを約束しています。

一番最初に送つてくれた手紙から、最近送つてくれたのまで一通もなくしていません。大切に引き出しにしまつてあります。私の誕

生日には、かわいい人形を送ってくれました。又、兵庫県の絵葉書なども、一枚々々説明をつけて送ってくれました。

この間、交通して一番うれいことがありました。それは、私が前から送ってあげるからといつても、スズランのついでにしているおりしか送れなかつたのが、本当のスズランを送ってあげたことです。そうして返事の手紙の中に、スズランを持って写した写真を見つしよに送ってくれたことです。あの時くらいうれしかったことはありませんでした。

いつか、きつと私としいちゃん与会える日があると思います。その時がまちどおしくてなりません。

## 弟の病氣

一年下組 工藤峰子

弟は四年生でとてもきかない。ところがある日めずらしく昼ごろから「頭がいたい。」と言い出した。私はちよつと痛むだけだろうと思つてあまり気にしないでいたが、弟がいつもとちがうので、気にしないつもりがだんだん氣になつて来た。父が「かせでもひいたんだな、めずらしいこともある。」と私と同じようなことを言い出した。でも弟は「こわいから寝る。」と言つてふとんを祖母に敷かせて寝てしまった。やがて母が仕事から帰つて来て弟が寝ているのを見て心配そうに「たつち、どうしたんだ。」と服を着がえながい言つた。私が「なんだかこわくて、頭が痛むらしいわ。」と言うや「それなら。」と言つて薬をのませた。その日は余り心配せずに置いたが、次の日弟のかぜはひどくなりだした。しかし母は早く仕事に行かなくてはならないので、「峰子、ひどくなつたらね、この電話番号に、えーと、③6.45に、かけてちょうだい。ひどくなつたらだよ。」と言つて出かけた。

この暑いのに弟はやはり「かせ」らしく、ねまきを三枚ぐらいついていた。私は、「この暑いのによく着るね、そんなに寒い。」と聞くと、「うん、少し暑いけど、ぬげは頭が痛くなるもの。」としようほり言つた。休みも終わりに近づき、私は宿題を全部やつたが、弟はテストが一枚残つてゐるらしい。一枚でよかつたが悪い時に病氣をしたものだ。昼ごろ少しよくなつたし、遊びたいと言つて弟を外に出してやつた。ところが少したつと、弟は青い顔をして帰つて来た。「どうした。」と祖母が心配そうに言うると、「頭が痛い。」と、ふとんを見るなり横になつた。私はひどくなればと思つてちゃんと寝せてやつた。やがて母が帰つて来た。寝ている弟を見て、「また悪くなつたの、青い顔して、薬のんだ、あ、水まくらしてやつたか。」と言つて冷たい水まくらをしてやつた。そして翌日めずらしく雨がふつてゐる。風もわりかし吹いて涼しかった。それに弟の具合がいつもより良いようだ。母も少し安心して出かけた。ところが昼から弟はまた起き出した。私は見るなり、「また悪くなればこまるから、もう少し寝ていなさい。」と言つたが、「もういいんだ、遊んでくるから。」と言つて、ぼさぼさした髪の毛を出て行つた。二十分ぐらいいたら弟が帰つて来た。「また悪くなつたか。」と氣を配つて聞いたら「なんも、夕方にテレビ見に行くから、それまでに悪くなるとこまるでしょ、だから少し寝ておくと。」と軽く言つた。「なんだ。」と思つてしばらく様子を見てみると、今言つたことを忘れたかのように、もう起き出して何やら一生懸命作つていた。



## 九州からのお客さん

二年F組 石川京子

八月十日七年ぶりに、九州から母の妹のさくらおばちゃん、その御主人が函館に遊びに来た。港で対面した時は、涙もろいおばちゃんが涙ぐんでいたそうだ。(私は迎えに出なかった)ちようど台風にぶつかり一晩青森にとめられて、母達は三回も棧橋に足を運んだと言っていた。そして、おばあちゃんの家に行つて姉妹四人で、死んだおじいちゃんのことなどを、泣いたり、笑つたり一晩中夜のおけるのも知らないで話をしていたらしい。母が帰つてきた時は、さも疲れたというような状態だった。

さくらおばちゃんは、九州の久留米に住んでいる。この前来た時は、私はまだ小学校一年生だったので顔もすっかり忘れていた。長い間九州に住んでいるので、言葉から身体まですっかり九州人になりきっている。母や私みんなが同じ日本人でありながら、さくらおばちゃんと話しをすると外国人と話しているように思うことがあった。

「こげんくいらのへびが台所から顔だしおるねん、うらめしか。」つまり台所にいるとへびが顔をだすので、おつかないといっているのだ。そのほか二十センチくらいのくもを、ねこがつかまえてきて知らないうちに、人間のスカートの上においていく話も聞いた。

十七日久留米商高と北海高校の準々決勝があつたので一緒にテレビを見た。なんでも久留米商高は、さくらおばちゃんの家のすぐ近くにあって、本家の子供が大塚といつて野球に出ていると言つていた。大塚が大会第一号ホームランを打つていると聞いて非常に喜んでた。家でテレビをかけると、家の中は両チームの応援が始まつた。父と私は北海、さくらおばちゃんたちは久留米、そして母は政

治的に言ううと無所属というように応援がちがつてきた。だから一方が喜ぶ時は一方がかならずくやしがつて、おもしろい夜だった。

## 運動会

二年F組 村上曜子

私達の運動は、去年もそうでしたが、予定日には、雨が降つて、延びてしまいました。しかし、何日か後には、とても天気が良く、絶好の運動会びよりでした。青く晴れあがつた空に、「若い力」の歌が、明るくひびきわたつていきます。それから、せわしい音楽がかかり、運動会の開幕です。徒競走など個人競技、団体競技、どんどん行事は進んで行きます。私は徒競走で、自分の番がきた時、胸がどきどきし、足ががたがたふるえていました。「ドーン」とピストルが鳴つたとたん「ドキッ」とし、無我無中で走りました。先にいる人を追いこそう、追いこそうと思ひ、ほんとうに無中で走りました。でもとうとう抜けなくて五等でした。賞品席を回つて帰ろうとすると、お母さんが見て笑つていました。急いでそつちへ行つてみると、「おじょうさん何等でした？」とふざけて私に聞いたので、「なにさ、見たくせに。」といつたら、「見てたけれど、今朝あんまりえばつていたから、こつちの間違いじゃないかと思つて、あらためて聞いてみただけよ。」といつて笑いました。席へもどると、みんながやがやと話しあつていました。今までに等をとつてしおりをもらった人はたくさんいました。私は一枚ももらつていないので、他の人のをうらやましがらばかりでした。さて、私達の組は、いまのところ三位だということを聞いたので、点数を数えはじめました。個人競技が終わつて帰つてくるたびに、「何等だつた？」と、聞き、点数を足していきました。

しかし、しばらくやつているうちに、あきてきたのでやめてしま

いました。午前の部で一番印象に残ったのは、体操部の体操でした。さていよいよ午前の部が終わって昼休み、食事の時間です。待ってましたとばかりと家へ帰ると、ご飯をパクパク、大きな西洋皿で三ばい食べました。お腹がいっぱいになったころ、友だちがお迎えに来たので、また、出かけました。せわしい音楽がかかり、昼の部の開幕です。私達の組の人が出るたびに、声をはりあげて応援し、友だちと、「これなら声が、かかれてしまうね。」と喋って笑ったりしました。やがてみんなが、まぢかまえていた組対抗リレーがやってきました。練習の時は、私達の組が男女とも一等だったので、今度もとみんなは思っていたようです。「ドーン」とピストルの音と共に、一せいに応援ははじめました。私も大きな声で、だれだれさんしっかりいと、応援しました。しかし、私達の組の男は三位、女は二位でした。みんな残念がっていました。私も、「一等はとれなくとも二位と三位だもの、いいよね。」といました。やがて、閉会式がおわりみんなは、家路にむかって帰っていききました。来年もまたがんばろう、そういつているように、雲が大きく静かに動いていました。

## 旅行

### 二年〇組 馬場 和子

夏休みを利用して、妹の病気の治療をするため東京の大病院へ行くことになり、私も母といっしょに行くことになった。しかし父は会社があるので行かれない。八月一日十八時十分発の連絡船に乗り、一等の婦人席に場所を取った。船内は三三度というものすごい暑さ。扇風機が回っていても汗はだらだら。たまらなくデッキに飛び出した。後にまわって見ると、十和田丸が海に巨体を浮かばせていた。いよいよ出発のドラが鳴り、デッキは別れを惜しむ人でいっ

ぱい。船はホテルの光の音楽とともに動き出した。私は船の中をぐるぐる回った。母は室で横になっていたが、私はデッキから離れなかった。あたりはもう、うす暗く函館市は霧がかかって見えないうらな船の前のあたりが、波がくだけて白くなっていた。広々とした海、空、かもめのほか何も見えない。私はテレビを見たり、デッキに出たりして時を過ごした。二時五二分に青森港に着き特急「北上」に乗り、二日の十二時に上野に着いた。駅に降りたとき、入口がたたくさんあってびっくりした。どこへ行っているかわからないでもおじさんが出迎えてくれ安心した。それから私達は地下鉄で渋谷に行き、世田谷までバスに乗りおじさんの家に落ち着いた。三日、今日は御茶ノ水の大病院へ行く日、渋谷まで電車で行った。電車は二個つながついていて戸が自動式、汽車のように駅もある。電車は渋谷駅が終点で、駅は全体がデパート。そこから地下鉄に乗り替え御茶ノ水まで行く。階段を上がるとすぐ病院で、とても大きく立派だ。四日、おじさん達と多摩川遊園地に行ったが、一番おもしろかったのはジェットコースターで下がる時とてもこわかった。帰り多摩川に寄った。広い川で真中に橋があり多摩電が走っている。川では魚を取っている人や泳いでいる人がたくさんいた。六日渋谷デパートへ行く。とても大きく東横・中館・西館と三つもある。七日、映画を見に行った。中はとても大きくエスカレーターがついていて、上はデパートになっている。九日銀座へ行く。銀座何丁目といろいろあるが、七丁目に行つて見た。人通りが多くにぎやかでおなじような店屋がたくさんあり、デパートもいくつかあった。二十日父が迎えに来てあす帰ることになった。観光バスに乗れなくなったので明日おじさんの案内で東京タワーなどに行く。一時ごろ家を出てタワーに行った。高さ三三三メートルある。関東一円を眼下に見下ろせる大展望台をはじめ、電気関係の展示、各放送局の送信機室やテ

レビのスタジオのある近代科学館など、ほかで見られない観光施設であった。次に私達は日比谷公園に行った。ここで一番きれいだつたのはふん水でいろいろ形がかわつた。次に皇居前広場に行き二重橋を後に記念写真をとつた。最後に浅草へ行った。観音堂の所まで道路の両わきに店屋が立っている。お堂にはたくさんの方が来ている。私達もお参りし上野駅に向かった。十九時五七分発の北斗に父と私は乗り東京を後にした。私は函館に帰りたような帰りたくなような気持ちだつた。

つ  
り

### 一年E組 樋 本 正 史

午後の池は、波も静かで水面は太陽に照らされきらきら光っていた。池のまわりのポプラは、その堂々とした姿を水面にうつしてゐる。つりに来ている人は五、六人でみんな自分の浮きをじっとみつめていた。虫取りに来た子供たちが、時々ワーワー言いながら池のまわりを走りまわっていた。

ぼくと弟は針に餌をつけて池に糸をたれた。糸のまわりに輪ができてだんだん広がって、弟の輪といっしょになって、すうっと消えた。ぼくと弟はだまって自分の浮きをみつめていた。あたりの水草がゆらゆらゆれ、午後の日ざしに当てられてなんだかうつとりとしてきた。

その時弟が、「おにいちゃん、フナがかかった。」と言つたので弟のつり糸を見た。ぼくは自分のさおを置きながら「大きいぞ。」と言つた。フナのうろこが、真夏の太陽に照らされてきらりと光つた。となりでつっていた子が、「早いなあ。」と言つた。ぼくは自分がつつたのでないのに錯覚を起し有頂点になつた。かんに水を入れながら、ぼくは「金ぶなだぞ。」と弟に言つた。弟もうれしくてうれしくてにこにこ笑つていた。また自分の浮きを見た。今度は

ぼくの番だ。浮きがビクビク動いている。急いで上げてみた。やっぱりかかつていた。弟のより小さいようだ、だがうれしい。かんに入れてやると二匹で水しぶきをあげてあばれる。針に餌をつけ直してまた糸をたれた。しばらくやっているとうちに、弟がもう一匹つた。ぼくのはあと何もかからなかつた。

あたりにはだれもいなかった。ぼくは弟に「もう帰ろう。」と言ふと弟は力なく「うん。」と言つて帰りたくをした。夕日がとてもしきれいだつた。ぼくは弟に、「あしたもこよな。」と言つて池を離れた。

### JA8BIK 二球ラジオからハムまで

#### 二年A組 又 坂 常 人

僕が初めてラジオ作りの妙味を覚えたのは中学一年の春である。その日ラジオ屋が家に来た。それでこのラジオ屋に回路図を書いてもらつて、それをもとにして家にあつた部品を使い。金百六十円也を出して、三日がかりで作つた。やつとでき上り、スイッチを入れたが、ウンともスンともいわない。びっくりして方々をしらべたが原因が解らなかつた。それで、とうとう手を上げラジオ屋に持つて行つた。すると「真空管が切れている。」と言われ、真空管を買つて帰つて来た。そして真空管をさし、レシーバーを当てて聞いてみた。初めはブーンという音だけだ。だが、ダイヤルを回すと、すごく大きく入つてきた。その時は嬉しく嬉しくて、たまらなかつた。

しかし、せっかく作つたラジオも、一週間たち、二週間たつてくると、だんだんあきてきた。ちょうどそのころ、兄さんから電器をもらった。それでさつそくバラシて部品を取つた。これですっかり準備ができたので、二球ラジオをこわし三球ラジオに組みかえた。

ちようど夏休みに入ったすぐ後だった。これは幸いな事に一回で、ちゃんとしてきた。これにすっかり気をよくして、本格的なラジオになってしまった。

このラジオで約一カ月くらい楽しんだが、だんだん不満になってきた。それで今度は四球ラジオを作ることにした。毎月ためた小使いで部品を買い、十一月に作り終えた。金をかけただけあって、このラジオの性能はすばらしく、すっかり気をよくした。が、人間の欲は深く、もっと性能のよいのがほしくなった。

ちようどそのころ兄さんから五球スーパーのこわれたのをもらった。それでさっそくそれを分解し、足りない部品を買って冬休みに入った十二月二十八日に組立て始めた。五球スーパーともなるとちよつとばかりむずかしく、でき上ったのは明けて一月二日だった。やはり五球スーパーの性能はすばらしく、函館以外の局もほとんど入り、すっかり気をよくした。

そして、そのころアマチュア無線をやっている寺島さんを探ね、ハムのことをいろいろ聞き、アマチュア無線に興味を、もちはじめた。

さてこの五球スーパーで、ずつと楽しんだが、短波も聞いてみたいと思ひ、五月に短波も聞こえるように改造した。短波は電波の伝わり方がよいため、アメリカ、ソビエツト、アフガニスタン、中京などの放送や、アマチュア無線が入り、すっかり嬉しくなった。

そのうちにこれも気にいらなくなりもつといいものを作ろうと思ひ、毎月少しずつ小使いをためていた。ラジオの故障を直し始めたのもこのころである。やがて金もたまつたので、このラジオを大巾に改造することにした。この改造は一週間くらいかかり、七月十九日に出来上った。今度のラジオは八球である。前のと比べものにならないくらい感度がよく、いつもボリュームを半分以下にしほつて聞いていた。

そうこうやっているうちに、どうしてもアマチュア無線をやりたいくなり、一大決心をして、アマチュア無線の国家試験を受けることにした。試験日は十月十日、函館の職業訓練所で、行なう事になった。それで九月に本を買つてきて読んだり、問題集を見たりして、一生懸命勉強した。

いよいよ当日の十月十日、試験は九時半からなので八時半に家を出た。問題は、電波法規と無線工学の二つに分れていて、おのおの一時間ずつである。初めにやった方、つまり電波法規は、割にやさしかったが、後にやった方、つまり無線工学の方は思つてもいない問題が出たため、すっかりあわててしまった。試験が終わり、忘れた頃の十月二十七日、家に帰つてみたら、合格証がきていた。ほとんどあきらめていただけに大変嬉しかった。それから二カ月たつてから、無線従事者の免許証が来、さらに一カ月たつた二月一日、待望の本免許があり、コールサインも、JA8BIKと決まり、やつとアマ局として発足した。函館で試験を受けて合格した人が、十人おり、その中で三番に、早く開局した。今は豆ツブのような送信機を使っているが、近いうちにもつと大きい、りっぱなものをつくろうと思つている。



「ベルだめ。」「ベルおいで。」今呼ばれているのは私の家の犬である。去年の六月に私の家に来た時からみると、今ではくらべものにならないほど大きくなってしまった。そして大きくなるにつれて、かわいさが増してくる。

ベルがきてから二カ月くらい、私の家はてんでこまいの忙しさだった。父や私がいる日はいいほうで、母だけの日は本当に忙しかったらしい。私が学校から帰ってくると、母はくたくたになつたような顔をして、よくこんなことを言つたものだ。「年をとつてから楽をするのがあたりまえなのに、年をとつてから忙しい目に合うんだから。」父も私もそう言われるのが一番いやだった。時々ベルのために口げんかまではじめることもあり、一時はベルを返すかなどと言つたこともあつた。

父は「スピッツ読本」という本を買つてきてベルのことについて色々と研究しはじめた。そうして「今にベルもこんなふうにしてみせるぞ。」と一人で嬉しそうな顔をしていた。

今ではベルも毛が長くなり立派なスピッツだが、それまではいくらスピッツだと言つてもだれも信用してくれなかつた。私の友達なんか「うそでしょう、本当にスピッツなの。」と言つて笑う人もいた。こうして秋も終わりになる頃、ベルの血統書がやつと手に入った。ベルの先祖はいへん血統がよいので、その子孫であるベルもいいはずである。私達はベルの身長をはかるのが楽しみだった。

ベルは体が大きくなるにつれてだんだん頭もよくなつてきた。芸はあまりしないが私達の話す言葉がわかるようになってきたのだ。だからなおさらかわいくなつてきた。

ある日のことだった。私が学校から帰ってくると、母は何か心配そうな顔をして私に話しかけた。「きょうね、渡島支庁の人が水道調べに来てね、ベルはお人好しだから飛び出して行つたら、その人変な顔してたから。」と言うのである。実は、アパートでは犬を飼われないことになつているのだ。本当ならとくに、管理人にことわつていいるのだが、管理人さんも犬が好きなので、散歩で出合つと、よくベルの頭をなでたりしてくれた。だから私達も気が楽だつた。しかしこうなつたらもうだめだ。なんと言つても渡島支庁の上の人に見られたのだ。私達は不安な気持ちになつた。それから二、三日して案の定、管理人がことわりにきた。いよいよ私達にとつて重大問題になつてきた。「どうしよう、おばあちゃん所にも預けるか、今さら離すことはできないしね。そうなつたらお母さん毎日ベルの所に通つて夜にそつと連れてくるか。」こんな話しをする。とベルは二、三日御飯を食べなかつた。「ベル、一緒に夜逃げするか。」冗談に父は言うのだが、本当にそう思いたくなる。「まあ正月まで様子をみよう。」こういうことになつて今はそのままになつている。

ベルはものすごく立派な体になつた。そしてこの四月に満一歳をむかえる。ベルは体はいくら大きくなつても、みんなにあまえて特にかわいいね。」とか「いい子だね。」なんて言うのを耳をすつかり後にやつて、目を細くして、私達の顔をペロペロなめてくれる。そうしたかと思うとこんどは、私達の体にびつたりついて昼寝だ。ベルは私の家の大切なむすこである。



## 夏の生活から

キャンブ

一年D組 尾上潤吉

十一日夕方家族全部で大沼へキャンブに行った。車中混雑していで身動きができず、その上に重い荷物をしょっているのが次から次へと出て来て限りがない。まるで蒸し風呂にでもはいっているようだ。空から景色を見ていると夕焼けが美しく、山々や沼がくつきりと照らし出され絵でも書きたいような気分になる。

大沼駅に着いたのは六時半ごろだった。ちょうど灯籠流しや花火大会をやっていた。街中は夜店の明りがまるで昼間のような明るさだった。夜空に色とりどりの花火が美しく飾られ、湖上には灯籠があざやかに浮んでいて、花火や灯籠流しを楽しむ人が大ぜい出ている。あちこちから「木彫りの熊はいかがですか。」とか、「名物の大沼だんごはどうですか。」という宣伝が聞こえて、いっそう祭り気分になっていった。テントを道新キャンブ村に張った。腹ごしらえをしてから知人の所にふなつりに行った。なかなかつれず弟と二人で六匹つるのに四〇分もふなかつた。ふながばくばくと口を開いた時に針を入れるのとつれるのださうだ。あまりおもしろいので時間のたつのも忘れるほどだった。顔中水だらけにしてつった。

附近で木彫りの熊を彫っていたので見に行つた。初めはだいたいの形だけ彫つて、あとをいねいに彫つて行く、根気もいるし長年やっていないとできない仕事だ。あざやかな手さばきに感心しながらテントに帰つた。寒いので、あらかじめ用意していたジャンパーと毛布を着た。あちこちでキャンブファイヤーをしていた。若い人たちの歌声が聞こえにぎやかだった。こうして夜中の二時までさ

わいでいたのにはおどろいた。

翌朝七時に起きるともう沼で泳いでいる人があった。ぼくも泳げるが沼では泳ぐ気がしなかつた。おなかがすいたので朝食がおいしかった。昼寝してから湖畔を散歩し四時の汽車で帰つた。車中、キャンブ生活の思い出をまぶたに浮かべながら下車した。

## 十和田

二年A組 斉藤真佐子

前から休み中に十和田をまわつて、青森のねぶたを見に旅行しようといっていた。日帰りなら疲れるし、もう旅館もあいていないしと、思案していたが急に四日に、父が、浅虫に良い旅館をせわしてもらつたからと言うので、五日の十一時四十分の臨時便で出発することにした。汽車が一時間近くも遅れ、そのため連絡船は十二時過ぎに出航した。船内では阿部先生に会つた。朝四時半頃目をさましたらもう湾内にはいつており、顔を洗つて五時頃下船した。すぐ十和田行きの国鉄バス乗り場へとかけつけた。遠縁のおじさんとおばさんが、バスの世話をしてくれ、いよいよ発車だ。社会科の課題のためガイドさんの言うことをいちいちメモしながらの見物なので、ゆるくない。提橋、大星神社を過ぎ雄大な、八甲田連峰をながめ、バスは一路十和田湖へ向かつている。焼山からは、奥入瀬溪流も流れこみ、流れあり、滝あり、島あり、緑ありの美しさが自然に調和され、紅葉の季節は又かくべつたさうだ。白巾、白糸、白絹、姉妹、友白髪、不老、等の滝や、馬門岩、屏風岩などの絶壁、阿修羅の流れ、とび金の流れなどの溪流の美しさ、九十九島などの島々にこげや木がはえすばらしいながめだ。

でも途中からあいにく雨がばらついてきた。それにバスが山道なのでひどくゆれ気分がすぐれない。船ではよく眠れず疲れているので、所々で居眠りをしていった。湖畔子ノ口についた時はどしゃぶ



# 冬の生活から

## 冬 休 み

二年E組 佐藤 英子

十二月二十五日(火)さあ、きょうから冬休みが始まった。今度の冬休みは、おくれた科目を一生懸命とりもどさなければならぬ。まず計画を立てなければならぬ。今までの経験からいくと、どこかで必ず、つまずいてしまう。今回だけはきちんと最後までやりたいたいものだ。でも、遊びといっても水泳しかなかった夏でさえも、つまずいたのだからあまり自信はない。それに冬は、スキー、スケート、お正月の遊びも加わってとてもいそがしい。今、どんなに良い計画を立てても、いざとなると、どうも遊びの方へ心が強く動くのを目にみえている。まずスキーには行かなくてもよいとしてスケートは、やっぱり一度位行きたいものだ。お正月の遊び、これはどうしてもみんなにつきあわさってしまうし、どう一生懸命考えても、勉強できない日数は、クリスマスに一日、スケートに二日、お正月に三日位、その他に映画も休み中に行きたいし、映画で一日とすると計七日間である。だから残るのは十八日間という事になる。この日数の内から、学校から出て、ぜひやっていかなければならない宿題に、国語(文集作り)・音楽・図画(版画)・習字・他に数学・手芸・冬休み帳、まあどう見てもざっと十五日はかかる。残るは三日の間に三学期に入りつつすぐ始まる、テストの準備もしなければならぬ。こう考えていくと二学期の復習、三学期の予習は全然できない。もちろん遊ばずにやるとしても……。

せつかくの冬休みでもふだんできないスケートなど、思いっきりやってみたい。それにスケートをやったからといっても、その

日一日まったく勉強しなくてもいいと言う事はない。でも数学、手芸など毎日少しずつやらなければ終わらないものもある。結局は毎日多かれ、少なかれやっているのである。

このように書き出して見ると、ちよつとらんざりするけど母に言わせると、「それがあなたたちの仕事なのだから仕方が無いでしよう。」確かにその通りだ。父も役所に行くし、母は家事でいそがしく働らいている。父や母たちの仕事と比べると、私たちの仕事(勉強)などは、くらべものにならない。この冬休みを、有効に使おうと思う。

「一寸の光陰軽んずべからず。」

一月七日(月)「一寸の光陰軽んずべからず。」と心に決めてやりだして丁度きょうで十三日目、もう半分過ぎたことになる。勉強の方も遊びの方もまあまあである。今までに遊んだ日は、二十五日クリスマス、三十一日年越しの買物、お正月の一日、三日計四日間である。

この調子でいくと、あと映画に一回、スケートに一回、その位でがまんしようと思う。はじめより二日も少なくなつたのは、やっぱりどこかでくるって、勉強する日が足りなくなつたからである。

遅れた日というのは、二十八日の日やる予定だった図画である。何度やっても失敗してばかり、その日仕方なしにそれをやめて、他の勉強に手をつけたものの、とてもじゃないけれど、頭にはいらぬ。どうにも仕方がないのでその日一日、だめにしまつたのだ。もう一日は後半でも、このような事が無いとは限らないので、とつて置くことにしたのである。

さあ、冬休みも半分残っている。できることなら、もつとスピードを上げて、まだまだ余裕が持てるよう努力しようと思つている。

一月十八日(土)長かった冬休みもきょうで終わらした。

スケートに行つて五回もころんだ事、近所の人、家の人と板ガム

タをやつて、乙女の姿の取り合ひをした事、又二日の日書初めをしてせつかくの着物に墨をつけて、お正月早々お母さんに、お目玉をもらつた事など、色々楽しい、そしてちよつぱり悲しい思い出が沢山できた。

でも明日からは、冬休み中の気分を早くおい出して、一生懸命勉強しなければならぬ。この冬休み中にはできなかった、高校入試の勉強もそろそろ始めなければならぬ。まあともかくにも、計画だけは思つていたより出来たので、ひとまず安心である。数学と手芸は二十一日に出すつもりである。手芸は近所のおばさんの、機械を借りて弟のスキー帽を編む事にした。一生懸命やつたおかげで、後は閉じるだけである。二年生も残すは後三学期だけである。

三学期になると修学旅行の話もそろそろ出てくるし、それを楽しみに頭張ろうと思つている。

## 年　こ　し

二年C組　倉　橋　恵　子

冬休みの中でなんといつても思い出になるのは年越しだ。この日はお年玉をもらうのと姉が病院から帰ってくるのが楽しみだった。

母が腕によりをかけて作つてくれたごちそうを、ひさしぶりに家族が全員そろつての食事だ。例年どおり茶わんむし、秋味、吸い物、口取りなどお正月用のごちそうだ。いつもより早く五時半頃食べた。たいや、えびはいかにも年越しにふさわしい、すまし顔をしていた。どうせもらうなら早い方がいいということ、食事の前におとし玉をもらった。わたしの予想は日ごろの心がけがあまり良くなかつたので、千円あるいは千五百円であったが、予想以上に二千円あったのはちよつとびっくりした。ほししいものはあれこれ沢山あるが、四月の修学旅行にそなえて全部貯金することに決めた。お年玉はもらったし、あとは食べるばかりだ。今年最後のご飯は、何

ともいえない味だった。同じご飯でも白く光つておいしそうだった。特に好物の秋味はおいしかった。

テレビをかけると、どこをかけたも々さよなら一九六二年と題して歌が流れてくる。九時からの紅白歌合戦は、毎年ねむくて最後まで見れないので、今年こそ最後まで見ようと思つた。九時まではまだ時間があるので最後の日を思い思いに過ごした。いよいよ九時になった。宮田輝さんと、森光子さんの司会で始められた。ただだまつて聞いているのもたいくつだったので出場者の名前を書いた。男女共二十五名だった。十時半頃年越しそばを食べた。なぜこの日はそばを食べるのだろうか。いつも疑問に思うことだ。この歌といつしよに一九六二年が流れていくのか、と思うときびしく感じられた。中間発表で男性が勝つていたのはがっかりだった。終わるころになるとねむけがさしてきた。歌のほうも一人、二人と、すくなくなつてきた。女性の最後を鳥倉千代子がかざつたのはとてもうれしかった。今年も残すところ五分くらいになったころ、わたしはふとんに入ってじよ夜の鐘が鳴るのをまつた。

## 函館山頂上へ

二年B組　東　達　美

一九六二年もあと一時間余りで終わろうとしてゐる。きょうは大みそか、毎年函館山から初日の出を見ようと計画しても毎年失敗している。「今年こそは」と決心して、プロラックや、帽子までかぶつて、用意を整えそのままふとんに入った。どれくらい寝たろうか。猫の冷たい鼻をくつつけられて目をさまし、時計を見たたら、午前三時だった。外は弱い吹雪だったが、竹すべりに乗つて、五稜郭電停へ行く。途中、初もうでの人達が少しと、タクシーが五・六台見ただけだった。電停に行つたが電車どころか、人影一つない。変に

思つて、あたりのはり紙を見たら「三十一日は午前三時まで運行」のこと。やけくそで、竹スベリで行つてやれと思ひ、電車道路のまんな中を、英雄になつた気持ちですべて行つた。道路のコンデションがよかつたので、二十分ほどで護国神社の前に着く。ハデな服装の男女数人が、キツキツとさわいでいる。やがてけいだいに入つて行くので後について行つたら、さいせん箱に、一円玉二・三個を、チャリンと落した。中は一円玉、十円玉、五十円玉、百円札、千円札、あげくは、サイフごとザクザク。これだけ金があつたらなあと思つて、登山道路に出る。吹雪が強くなつてきたので、サンダラスをかけた。こつちは、歩いて登ろうとしてゐるのに、しょつちゆう、タクシーがブーブー言うので、腹がたつた。金のある奴は、タクシーかロープウエー、金のないやつはテクシー。けれど、ゆつくり景色が楽しめる、負け惜しみを言つて、黙々と歩く。だんだん歩くにしがつて、目の前に、豆電氣をつけたように見えたものが、あずきのつぶのようになり、歩けば歩くほど小さく美しくなつてくる。それはまるで、真黒いビロードの上に、金のつぶと、ダイヤモンドをまき散らした様だ。来る時、町の屋台の酒屋でさわいでいる人、やけくそで酒を飲んだる人、まっかな顔をして、大声でなにやらわめきながら歩いてゐる人。そんな人達を、たくさん見て来たが、景色を見てゐると、不思議にも批判的な氣持が同情的な氣持に変わつてきた。歩いて登る人はだれもいない。時々タクシーがブーブー言うくらいだ。吹雪は弱くなつて、あたりがぼんやりと明るくなり遠くの山々がくつきりと浮かんできた。船は町の灯よりも大きく弱く見え、連絡船が、動いてゐるのか止つてゐるのかわからない。自動車が、急に下の方からやつて来た。氣にもとめなかつたが、道路のがけすれすれまできて曲つたから、みぞのようになつてゐる所に足をハメ、雪を出したが足が冷たくて、しょうがなかつた。

た。頂上のタワーが、目の前にいっぱい広がつてゐるのに、歩いても歩いてもなかなかたどり着くことができない。函館山の頂上から下まで、道路は斜面にそつて、ぐるぐるを巻きついでゐるひものようだ。だから、頂上へなかなか達する事ができないのだから。頂上には着かざつた人々がごろごろしてゐた。まるで大門の盛り場と同じくらしいのにぎやかさだつた。寒くてしかたがないので、タワーの中にある食堂へ行つてみた。こゝは、満員電車のような人の波。外へ行つたら寒いし、ここにいようと思つて立つてゐたが、空気がむうつとして、氣分が悪くなる。そこでロープウエーの駅に行つてみたが、こゝも人がいっぱい。甘い物が欲しくなつたので、売店へ行つたらストロブが赤々と燃えてまわりのイスはあいてゐた。救われた氣持ちで、ストロブにあつた。いつしかうとうとしていた。時計を見たら、五時ちよつと過ぎた。またうとうとして、ラジオの音で目がさめた。七時二十五分頃初日が出るといつた。外はまだ真暗だったが、売店の窓から、人々のようすを見るだけで、たいくつはしなかつたが、函館市の方々から来たこの人たちも、またあのちつぽけな町に帰つて行くんだなあ。人間はこんなごみごみした所に住んでゐるのか、と思うと怖るのがいやな氣がする。六時半ころ恵山沖の方から、濃いぐんじょう色が水平線の彼方から、だんだん変色してくるのはみごとな眺めだ、七時、いつしか雲があざやかな色を見せてゐた。七時十五分、雲で初日がかくされて、ただ真っ赤になつた雲が見えるだけだ。いつまで待たつて出やしないと思つて、山を下りる決心をした。ただ山を下るのもつまらないので、急斜面を伝つて下りることにする。道がないので、適当に下りたが、吹きだまりがなかつたので、たいへん楽しく下りた。登りはいろいろな苦勞をしたが、その苦勞も今になっては楽しい思い出となつてほんとうによかつたと思う。あの函館の町の灯の美しさは、一生頭の中に一枚の美しい写真になつて残るだろう。

詩

想



北風

二年B組 若山光子

思ひ出の歌

二年E組 倉壽子

母がいつも口ずさんだ思ひ出の歌

疲れた時あのやつれた顔に微笑をうかべ

いつも口ずさんでいたあの歌

縫物をしながら洗たくしながら

いつもいつも歌ったあの歌

夕焼け小焼けの赤トンボ……

母が歌っていた頃を思ひ出す

今はただ一人窓辺で私が歌う

あまくあたたかい孤独が私を包む

おわれてみたのはいつの日か……

母の声が心に残る思ひ出の歌

人々は肩をすぼめ

口を堅く閉じ

冷たい無情な冬の使いが

素肌を刺す

枯れ葉を吹き飛ばし

人々の吐く息を白い煙に変え

灰色の街に佇すむ人影を

孤独にさせる

悲しくきびしい音の世界

人々は歩む

誘惑の声を耳にしながら

冷たさを胸に感じながら

# 病院

二年E組 倉 寿 子

ソ リ

二年F組 佐々木 仁

ブーンと消毒液のにおい

患者の青白い顔

看護婦の無気味な足音

薄暗い廊下 汚れた待合室

冷たい診察室 奇妙な器械

不安と恐怖のカクテル

医者「切らなければだめだ。」

灰色の寝台 にぶく光る注射の針

メスが光る 苦痛 紫の血

白い包帯 明るい窓に雪

そして私は苦痛から解放された

吹雪の中を ソリは走る

雪をらり鈴を鳴らして

吹雪をついて 馬は走る

町を目ざして 風のように

ムチの音が 吹雪にまじって

激しく耳のそばで鳴る

雪は降る 馬にも人にもソリにも

鈴の音高く 馬は走る

赤々とだんろろが燃えている

町をめざしてソリは走る。

## 風

風がなげく 遠くの空で

風がつぶやく 川辺のあしをゆらし

風がさけぶ 雲を散らして

風はなげく 雪を吹き散らして

風はなぜに なげくのか

おのれの身のつらさにか

いやな思い出を吹き飛ばすためにか。

風がさゝやく 北の山で

風がうなる 南の海で

風がくるう あらしを起して

風はいかる のどを鳴らして

風はなぜに いかるのか

おのれの身のよわさにか

孤独な世界を吹き飛ばすためにか。

二年F組 佐々木 仁

## 夜

夜が来る 冷たい夜が

黒い花びらまきながら

深い眠りをまきながら

人も家も眠りに誘う

眠りの精が暗い国からやって来る。

月と星を従いながら

寂しい夜が来る

黒い霧をまきながら

冷たい雨をまきながら

静かにやって来る。

二年F組 佐々木 仁





二年F組 村岡千鶴子

学校をおそく帰ればわが母はほどほどにせよとスポーツ案ず

雪の夜ストーブ赤し一日の出来事語るだんらの時

板の間を素足で歩く母の足真赤にはれる冬のきびしさ

二年E組 倉 寿 子

友達に別れ惜しんで手を振れば我ふるさと離れる寂しさ

成人の兄を祝いて我父は新しき時計を贈るなりけり

二年B組 若山光子

冬の夜ひえびえとした部屋のかべ弟のかけ大ききうつつる

宿題の短歌作れば夜ふけて蛍光燈のしらじらさよ

冬近し霜のおりたる道端を吐く息白く通る人々

くもり空風吹くたびに立ちならぶ木の葉の音が冬を迎える

二年E組 前田敏子

夕食のおかずを話題に母語る戦争中の食べものこと

二年E組 中村ユミ子

ふろに入りきょうの試験を思い出し湯気あがる手で窓に字を書く

かきの木の間よりもれくる月の影ふろの火たく母と語り合う





雪の朝犬の足あとうめの花

二年D組 白木政子

がいとを厚く身につつけ初参り

二年A組 藪下明

夜ふけてうなる霧笛に雪の舞い

白銀を二つに切つて雪けむり

冬空を二つに切つて流れ星

二年A組 藤井雅憲

すずの音遠くきこえる馬そりかな

二年C組 石附幸子

秋祭りきれいに着かざる人の波

山小屋のランプがゆれる吹雪かな

夏の道するめのおい浜近し

台風にまけずにおうダリアかな

二年E組 前田敏子

庭のすみはずかしそうなよこれ雪

二年E組 中村ユミ子

教卓にわが持ち来たたる菊の花

夕やけや友と並びし影ふたつ

二年B組 三上正義

雪の上くもさむざむと歩きけり

二年F組 西村静子

あまぐりの匂いなつかし秋の夜

星映し静かにゆれる寒の水

### 思 い 出

二年F組 奈良香代子

大きな影と

小さな影

楽しそうに

通った

月のきれいな夜

トオカイの

そりのあとのように

雪が光っていた

## 「母と少女」

一年F組 三 鹿 律

この本を書いたのは、アレクセイ・トルストイという作家だ。私がこの本を読んで一番感じたことは、戦場の戦いでなく、その裏にかくれた、かわいそうな人々が生きのびようとする努力、そして悲しみ、あわれみであり、またおそろしさを知らないゲシュタポを、目の前にして書いていっているような感じをあたえる表現や、かざりけのないことばの中にも、ありありと戦争を憎んでいるようすがにじみ出ていることである。この本の主人公「ワリーヤ」は、あの大きなソ連の小さな小さな一生命にすぎなかつたろう。しかし、この本の中でユリーおじさんが「一人の子供を殺すと、世界中の人が平和に、そして幸福に暮らせる」と言っても、私ならそういうことをしない、ほかの人もそう思うだろう。」と言っているように、たとえどんなに小さな取るに足らぬ生命であつても、その生命の犠牲の上に人々の平和や幸せを築いてはならないのだ。何の罪もない子供を殺すということは、何百万、何千万という人を苦しめた人より、もつともつと悪いことだということはこの本は強く述べている。この本には、ワリーヤ、ユリーおじさんのほかにもう一人重要な人物がいる。それはちょうど「コウモリ」のように勝つて一方へ行つたり来たりしている男「ミヘイ」だ。この男は自分の祖国を敵に売つていようなものだ。ワリーヤはこのミヘイのために母親を殺され、そして、ある人の感想がのべられており、その中に「戦争はとてもこわいものです。この物語から何か学んだ気がします。」とある。私もまた

戦争がなければワリーヤ、おかあさん、ミヘイというようにかわいそうな人々を出さずにすんだものと思わずにはいられない。あの憎むべきミヘイだつて戦争の被害者なのだ。自然の災害を防ぐことはもちろんできない。しかし人災は防ぐことができるのだ。「話し合い」という四つの文字で解決できるはずなのだ。それができなかつたことが残念でならない。「ワリーヤはすぐそばに立つていました。ワリーヤはふるえるこぶしをにぎりしめて、じつとミヘイの顔をにらみつけていました。」という文章でこの本は最後を結んでいる。この時のワリーヤの心の底には、ミヘイを死刑にしても、母は再び帰つてはこないさびしさ、ミヘイを自分の手でみつけどし殺すことのできた喜び、母をうばつた憎しみとが、はげしい音をたて入りみだれていたことだろうと思う。私はこの本を読み終わつてから、静かに現在の世界に目を向けてみた。A国側とB国側はたがいにかたがたに、険しい状態になっている。こんなことでは、戦争のおそろしさ、むごさを、この作者をはじめ多くの他の作家がどんなに書きつづつても、それを考える人々がいかに叫んでも、何の役にもたたない。文字や声となつて消されてしまうのと同じことだ。そして世界のどこかにもまた、ワリーヤという悲そうな少女を出してしまうのだ。この本は、戦争を二度と繰り返してはならないと叫んでいる。肉体も愛情もすべて失われてしまう、あのおそろしい戦争を繰り返してはならないと。

書名 少年少女世界文学全集

「母と少女」

著者 アレクセイ・トルストイ

訳者 久野 公

発行所 講談社

# 「聞けわだつみの声」

一年E組 高 光 美 幸

学生たちが自分で集めた戦死学生の手紙、戦場・兵舎から肉親、友人に出した手紙、日記、手記などを一冊の本にまとめたのがこの本である。ぼくは今おおむけになってこの本を読んでいる。読んでいくうちに、映画で見たような南太平洋、支那、フィリピン方面の戦場の光景がまぶたの裏にうかんできた。そのころの青年はどうであつたらうか。

「初年兵には夜九時半消燈と同時に床にはいるまで、自分の時間は一秒たりともなかつた。このまま死ぬのではないかと思われるような猛訓練の時が、一番人間らしい気分になれる現在です。一ヶ年の軍隊生活は人間性をうばってしまう。僕の気もちは死人同様のひさんなものです。(福中五郎)」このような手紙を上官に見つかつたら恐らく殺されたらう。ぼくはこの人をえらいと思う。なぜなら自分の正しいと思う事を危険をともしないながらも、当時の社会情勢の中にあつて言ひのけたからである。軍隊優先のこの時に軍隊を批判した勇氣と意志の強さには感心した。はつきりと批判できなかつた大部分の兵隊は、心の底で同じ気もちがあつたと思う。「生きたいとこれほどまでに考えつつ死に直面した時の苦痛は、思いみるだに顔をそむけなくなるほど、そつとするものであらう。生きて帰る。俺にはまだまだ、山ほど人生があらう。いや俺ばかりでない。生きとし、生けるものがすべてだ。(上村元太・原文)」死にたくないと思ふ心と逆に、日本の学生たちが次々と死地に進んだのはもちろん強制されたからであらう。

「一、軍人は忠節を尽くすを本分とすべし」などというような形だけの標語が彼らを動かしたのでなく、あたりの権力が彼らに批判する余裕もあたえず、自分たちのほしいままに動かしたのだとぼく

は思う。「ただのつまらぬ凡人として一生を送るかも知れないのである。此の頃になつて近づくと死と云うことが恐しいものではなくなつた。(高木孜)」

勇氣、自己犠牲、このような心でたつた兵士はりつぱだと思ふ。しかしそのりつぱさもおろかな戦といふものを見きわめるには何ら役立たなかつたのである。戦争はりつぱな青年から先に殺して行く。若い生命あふれる青年を次から次へと権力のからくりの中におとし入れて行く。この本の底から音をたてて流れてくるものは地の底に眠る数知れぬ犠牲者の血のさけびであり、彼らの血のさけびは戦争美德のからくりをあばき、勇氣と自己犠牲をわれわれのために人間のなものであるためにと訴えているようだ。戦争とはこのようにつらいものだ。私たちは静かに「わだつみの声」に耳を傾けようではないか。

書 名 きけわだつみの声

編 集 日本戦歿学生手記編集委員会

発行所 東大協同組合出版部



## 「野生のエルザ」を読んで

二年〇組 渡 利 三 郎

この本の著者クアダムソン夫人は東アフリカの獣監理官ジョイ・アダムソン氏の夫人でジャングルの中で動物を相手に現実離れした生活をしている人だそうです。

ジョイ氏が拾って来た三匹のライオンを、二匹は動物園に送り、一番小さかったライオンを育て上げるまでの話で、非常に変化に富んでいて、おもしろく読みました。

この世の中に、ライオンなどをベットとして飼っている人は少なくはないだろうが、しかし著者とエルザのような固い心のつながらないと思う。なぜなら、著者はエルザを自分の娘同様あつかって来たからです。

「動物達の生活のしかた」「インド洋に行ったエルザ」など、たくさんのエピソードをためて書いた本で、読んでみると、いつも、ほほえませられるようで、時には、ゲラゲラ笑わせるような内容です。一人前になりかけると、ロバを追いかけて回したり、ゾウをからかい、キリンとにらめっこしたり、読んでいる方で、ハラハラしたりします。著者が、いかにもエルザが、かわいくてどうしようもないというふうで、おもしろおかしく、そして、しんみりさせるような調子で、話をすすめて行きます。

人間になれきって、著者がいなければ生きて行けないようなエルザをどのように自然に帰すか、自然に生れた動物は、自然に帰した方がよいという作者の考えに、全く感動され、また感心しました。

この本の原題はBORN・FREEだそうです。

調べて見ても、やさしすぎて、わけがわからなかったのですが読んで行くうち、意味がだんだん分って来たような気持です。食物の食べ方、オスライオンとの結婚の仲人の苦心。恐ろしいライオン

が、このようにまで人間になれきって、夫人の指をしゃぶったりするだろうか。そんな疑問から、買った次の日にもう読み上げてしまった。実におもしろかっただけでなく、動物への愛情、そして著者の苦心など、おどろきの声をあげらずにはおれませんでした。この本には写真がたくさんあって、たいくつせず、小学生でも読める本です。テレビにあきて本を買って、このような良い本にあたって非常にうれしかった。どうぞ、テレビ族の皆さんは、この本を読んでください。きつとテレビなどつまらなくなるにちがいない。そして二日もたないうちにこの本のとりこになってしまおうでしょう。「早く、この学校にも、このような本をそろえてほしいな。」とそこまでも考えてしまいました。

著者 ジョイ、アダムソン

「野生のエルザ」

藤原英司訳

文芸春秋新社

290円P一九六



# 部 報

## クラブ活動の歩み

### 文化クラブ

今年の美術クラブは、去年に比べると人数もふえ、活動もさかんで、すごく発展したものだと思う。

## 美術部

色がきたなくなつて困つた写生、初めてコンテを使つてのクロッキー、ワーク・ブックによる色彩学習、ベニヤ板の版画、雪の彫刻など、いろいろなことを勉強して来たが、なんといつてもおもしろく楽しかつたのは、夏から秋にかけてのねんど工作・石膏どりであつた。いくつかのグループに分かれ、ソフトボール大会やマラソン大会、運動会風景などを主題にして、レリーフをやつた。四十種に六十種もある大作である。自分の作り上げた粘土の作品に、初めて石膏を流した時は本当に嬉しかった。そして女型を割るときとの興奮は忘れることができない。削りすぎて失敗したところもあつたが、ますますの

できであつた。夏休みの駒ヶ岳登山も強く印

象に残ることの一つだ。空はとても晴れて快適だつた。自然に足が速くなり、とうとう途中でグロッキー。雄大な景色にひたつて描いた絵はまだ大事にとつてある。帰りは銚子口で泳いだりして楽しい一日だつた。秋には初めての文化祭も経験した。毎日夜おそくまで僕達は熱心に製作したり、飾りつけたりした。当日、父兄のみなさんが、熱心に作品の一つ一つを目をみはるように見て下さる姿を見て、自然に笑いが浮かんで来た。あのときの喜びはこの一年の最高のものであつた。僕は決して忘れないだろう。文化祭が終わつたあと慰労のパーティーがもたれたが、女生徒の作つた料理を食べたり、みんなでトランプ遊びをしたり楽しくすごした。

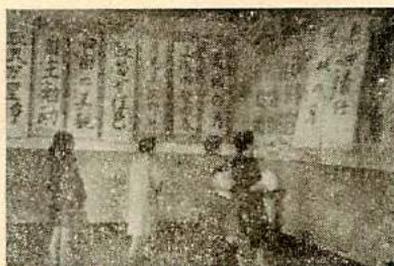
これからは、油絵をやりたい。一週ごとに変化のある活動をやつてほしい。合評会をふやそう。週二回くらい活動しようなど、いろいろな意見や希望があるので、みんなで相談し、ますます楽しく、有意義なクラブにしていきたい。

### 部 員

二年生 佐藤、桶谷  
一年生 五味沢、村山、大石、端川、中川、葛西、星野、北川、平川

## 書 道 部

私たち書道クラブ員は、一年二年合わせて十八人位ですが、時々クラブ以外の人たちも練習に来たりしています。



展 品 作 部 道 書

指導の先生は平沼先生一人ですが、みな先生に悪い所をなおしてもらつたり、みんなの書いたのを批評してもらつたりしています。練習日は先生や私

この間の、冬休みの時には、クラブの人が全員集まり、一日目は書きぞめの練習、二日目は練習をしてから、先生が一人一人の良い所悪い所などを見だして、筆をとつて教えてくれました。三日目は消書をして、前の方の黒板にはって、みんな批評しました。

その時はちよつとした、書道展を見に行つて  
いるような感じでした。

書道の本来の目的は、精神統一だそうです。  
たとえ、すみをするでもおろそかにして  
はならない。練習している時でも、清書を書  
く時でも、一字一字に気を配り一字一字をて  
いねいに、書道の目的にそれないように、真  
剣に書き上げていきます。この真剣に書き上  
げていく態度は、書道クラブ員の最も誇りと  
するところです。

私たちは、日一日と成長していきますが、  
それにつれて書道クラブも練習日や練習時間  
をふやしもつとよりよいクラブを築き上げて  
いきたいと思ひます。

また、書道を通しての友情や、書道の目的  
をも、もつともつと深めて行きたいと思ひま  
す。  
(尾崎美代子)

## 音楽部

部員五十名、このうち合唱部と器楽部の二  
つに分れており、御指導下さる先生は、桜井  
先生と、このようなしくみで、私達の音楽ク  
ラブは発足しました。器楽部では、まだ楽器  
も十分ととのつていないので、おもにスベリ  
オパイプの合奏を行いました。単に笛の合  
奏といつても、ひとりひとりの心が一つにな  
り、そのパート、パートが正しく響き合つて

美しいハーモニーをかもし出さなければなら  
ません。ですから何度も何度も先生から、御  
注意を受け練習をして、初めて合奏が完成さ  
れます。それだけに合奏が起き上がった時は  
うれしくて、練習の時の苦労など一べんに忘  
れてしまい、又意欲が燃えて来ます。私達ク  
ラブ員の一番心に残る思い出は、なんとと言  
つても文化祭です。文化祭と言つてもまだ第一  
回目で、体育館も完成していなかったので、  
音楽室でクラブの発表会を行いました。音

楽クラブ発表会のはか、手芸・書道・図画・  
工作などの展示、弁論大会、映画会のごく小  
規模なものでした。でも私達が春から約八ヶ  
月練習してきた間に、これといった発表の機  
会もなかったのに、みんなはここぞとばかり  
練習に励みました。いよいよ当日、プログラ  
ムの一番目は、合唱です。皆幾分緊張して歌  
つたようです。その日は、校長先生をはじめ  
先生方や、音楽室がいっぱいになるくらいた  
くさんの人が、私達の発表会を鑑賞しに来て  
下さいました。二重唱・独唱・独奏・合奏な  
ど、今まで練習してきたものを、この発表会  
に力いっぱい歌い演奏しました。三回にわた  
つて行なつたので、少々疲れましたが私達に  
つては、非常によい経験でした。これから  
の希望としては、設備をととのえてもらうと  
ともに、私達クラブ員は練習量をもつとふや  
して、今より一段と進んだ、楽しいクラブに

## 社会部

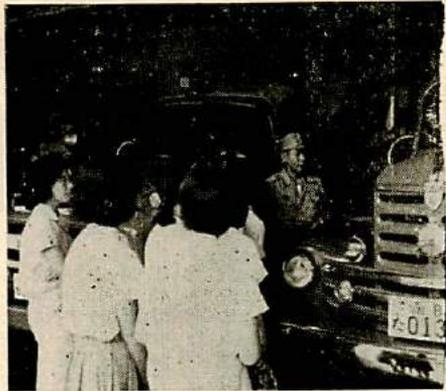
したいと思ひます。  
(斎藤真佐子)

昨年四月新しい一年生を迎え西谷先生、窪  
田先生を中心に集まった。最初みんなの希望  
で各所見学ということになり、夏休み中にN  
HK、消防署等を見学したが、集まりが悪く  
ごく少数で終わってしまった。見学者が少な  
かつただけに、文化祭の活動が大きく期待さ  
れた。

社会クラブでも準備を早くから始めた。そ  
れにクラブ員の団結が目立ち、学校に遅くま  
で残つてがんばる人も多かつた。当日は時間  
が経つにつれて会場の中はお客でにぎやかにな  
つていき、クラブ員一人一人の作品につい  
ていろいろと批評を受けた。中学校へ入つて  
最初の文化祭として印象に残る二日間を過ご  
した。そして来年も、今年以上に良くやろう  
と一人一人が心に誓つたろうと思う。

その後クラブは開店休業の状態であつたが  
その間僕たちはエネルギーをたくわえ次の活  
動に備えた。一月に僕と福島君が相談してク  
ラブ新聞を作つてはどうかと思ひたち、いま  
で見学したことを、クラブだけのものにせず  
に他の人達にもと考へ「社会クラブ第一号」  
を見学だよりとして出版した。でもあまり良  
い出来ではなかつた。今後第一号の経験を生

かして第二号、第三号を出しクラブ伝統の一つとしたいと考えている。



風景学見署消防

またクラブをもっと団結したチーム・ワークの取れたものに向上させたい。そして四月から新しい一年生と共に活動を続けていきたいと思う。昨年の四月から今まで、クラブ員の一人として、クラブを向上させよう、少しでも後輩のためにクラブ特有の伝統を作ろうと努めてきたが、今だに伝統らしきものができていないのが残念である。クラブ向上のためには見学（文化祭の時の団結、努力と苦勞を支払ってきたが、これからも一層クラブを向上させ、そして活動しやすい楽しいものに育て上げていきたいと思う。（河井明吉）

## 科学部

本年度の科学クラブは指導者としては新任の石塚先生が加わり、部員数は大きく七〇余名の急増をみせ、生徒会費の面や、特に文部省から交附される設備など予算上の明るい見通しなどに合わせて、輝やかしい希望をもって発足されたのである。

機構上の特長としては

第一に 第一分野は千葉先生、第二分野は石塚先生がそれぞれ分担をなされて指導されること。

第二として 昨年極めて少数だった女子部員が多数加わったこと。

第三は 新一年の部員中、小学校においてのクラブ活動にも極めて熱心に行っていた者が多数いたこと。

などがあげられ、今後の活動発展が期待される。

運営の仕方は、各自の希望によって第一分野は昆虫班、植物班、地学班、第二分野は化学班、電気班に分かれて、それぞれ班単位に班長のもとに、自主的に計画活動を営むことにしている。

年度の終わりにあたって各班の活動内容を集約すると、第一分野の各三班は、特に夏期休暇を中心として採集会などを開き、研究物は数点博物館出品迄の成果をつくり出す事が

できた。第二分野における化学班は、特に熱心で自発性に富んだものといわなければならない。毎週必ず班員が集まって、暗くなるまで実習している姿が一日はみられ、担当の先生達も熱心におされ気味の模様であった。電気班は特に文化祭行事を中心として活動し、十分とは云えないかもしれないが、一教室をあけて設置し、文化祭の一端になった努力は認められるものである。

然し全体の反省の上には設備の不足、特に理科室、理科準備室を持たない事は大きな障害とはなっていたが、自主的な活動を進めるグループの



科学部

中心になるリーダーの指導力と熱意が重要だと思われ、その意味で化学班の活動が他の班の模範であったと思う。来年度は更に学校も完全な形体ができ、生徒数も一層ふえ先生方の陣容も

より増加される事であろうから、この点を考えて部の発展のため努力を続けたいと思う。

（杉村誠一郎）

## 文 通 部

去年の七月ごろにできたクラブである。約九〇人の部員だが、輸送量などの関係で、文通している人は少なく、主に二〇人位の代表の人が文通し活動している。

去年の七月ごろ、前の学校でも文通していたという笠井先生が、知人に頼んでアメリカの学校を紹介してもらったので、文通したい人は集まれ。といってこられた。そして最初は

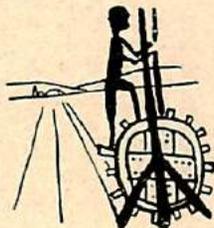


文 通 作 品 展

本校から出すといわれるので送る物を集めた。一年生全部が力を合わせ、千羽鶴を折ったり、日本切手を集めたりした。また代表の人達は、かたことの英語を使って手紙を書いて、テープに吹きこんだりした。そして返事は九月にとどいた。中には世界的な雑誌ライフ、デズニーやバレーの絵本や、厚さ十センチ位の切り抜きも入っていた。そして中に手紙もあり、女子から男子へと来ているのもあって笑ったこともあった。

そして、すぐ文化祭だったので、手紙を訳したり、万国旗を作ったりした。十一月までは全く活動はなく、十二月に文通してくれという手紙が笠井先生のところに来て、冬休みに入り年賀状を出した。そして運賃が足りなくてみんなで少しづつ出したこともあった。このように文通クラブは、代表だけというのは残念であるが、地理的な知識が求められる楽しいクラブである。

(山崎正吉)



## 体 育 ク ラ ブ

### 野 球 部

入学して中央中のグラウンドでボールをにぎってから、もう二年も過ぎ三年目を迎えようとしている。昨年入った一年生は、もう我クラブの中心になろうというところまで進歩している。我々二年生は相変わらず、決った顔ぶれで練習に励んでいる。この年も終わるにあたり、昨年のことを少し思い出してみよう。

我々はまだ中学野球界の実情も知らず、ただくせんと練習に励み、新入生も何も知らずに練習していた頃、少年野球大会に初めて出場した。初めての千代ヶ岱球場で、新川中と戦った。真新しいユニホームを着て勢列した我校は大会長から、「二年生だけでどうとうと参加してくれたことは大変うれしい。」とほめられ、第一戦に臨んだ。

全員ふん闘し、各先生方はじめ生徒諸君の熱心な応援をいただいたが、延長戦で敗れてしまった。「一回目でこれだけ戦ったんだから。」と言うことを慰めとして涙をのんで球場を去った。それから夏休みも、平日も降り注ぐ陽光を浴びて、練習に励んだ。しかし中体連の大会を前にしてチームワークが乱れたことに気づき、団結を固めようとしたが間に合わなかった。中体連の試合も、対新川中と第一回戦で、前の試合と全く同じだった

それだけに皆気楽にいき過ぎたのか、各校の絶大なる応援にのぼせたのか、全員調子が悪く、ついに敗れてしまった。三年目の今年こそは、昨年のできなかつたことをなしとげたいと思っている。シーズンオフには自主的トレーニングをしたり、新設された体育館で柔軟体操をしたりして春の実戦的にそなえている。昨年の苦い経験を活かして今年こそ後輩に胸を張って残せる野球部にしたい。また優勝旗も残したいと思っている。熱心に応援して下さった生徒諸君並びに先生方には都員一同厚く感謝し、今年に期待して欲しいと思っ

びとする。

(小田晴久)

B)A)C)O)B)D)B)D)B)E)C)  
 (2)2)1)2)2)2)2)2)2)2)2)2)  
 田井浪田利沢分場藤藤田地辺崎  
 小藤川宮渡畑園稲工斎成浜渡山  
 P C B B B S F F R F  
 1 2 3 S L O ス コ ア

## 体 操 部

私はタツキリと空間に白線を引いた。跳箱の真白いところをにらみながら、助走のスタートをおこした。タツタアタタと軽い足音

## 体 操 部 演 技



をたてながら「よし。」と心で言いながら、ロイター板をチラリと目に入れてから助走の速度を上げる。白い線は目の前にあった。思いきりロイター板をきって跳躍した。殆んど無意識に手が跳箱にかかる。体全体がフワリと空中になげ出されるような一瞬の印象も姿勢を正しく安定させるために全精神を集中する行動の中に消えていった。マットに足がつく、タツタと着地、そしてみんなのそばにかけよって聞いた。「どうだった」と。これは体操部の練習風景の一コマである。

私達は思い出なつかしい元兵舎の分教場の薄暗い廊下の一隅で、阿部先生の指導で「前転」「後転」を繰り返して練習を繰り返した。体操部の輝かしいスタートは、昨年の大運動会が六月の緑の、陽の下で新しいタリム色三階建の校舎と、アンツーカー色に仕上げられた校庭で開かれた時の特別演技の発表であった。部員一同の晴れがましい中にも緊張した顔と顔が今でも思い出される。阿部先

生のニューモアのある指導で技術をみがいて、秋の中生体連出場にそなえた。各校の三年生中心のチームに負けずに、五稜中学の「G」のマークをユニホームにつけて堂々と戦った。この三学期から、立派な体育館で恵まれた練習ができるのだ。体操は身心の正しい発達を助ける。時間も場所も器具もなくてもできる徒手体操が基本である。一人でも多人数でも行なうことができるのだ。キレイな音楽にのった体操の演技を考えてみて下さい。今年度は全学年完成の年であるから、新部員の参加とともに五稜中学体操部の名をあげよう。

(棚池正治)

## 陸 上 部 (男)

去年はなにもできなかった陸上部も今年はず想像外で活躍だったと思います。

初めは何もないグラウンドを、ただ走ったり跳んだりしていただけでした。ところが用具が整ってきてからはがぜん張り切りしました。

それでもめぼしいものは走り高跳びのバークらいでした。ひにくなことに走り高跳びの正式な跳び方を知っている者はだれもおりません。そこで顧問の小川先生から正式な跳び方をおそわり、わずか三、四ヶ月でまあまあというところまでマスターできました。やがて砂場ができ、走り巾とびなどが行なえ

るようになり、また砲丸なども整い一通りのことはできるようになりました。

試合として初めて行なつたのは対桐花中戦でありましたが、この時はたった五、六点の差で残念ながら負けました。待ちに待った中体連の大会では、女子の活躍はめざましいものでしたが、我々男子は全然ふるいませんでした。三度目の試合はNHK放送陸上競技大会でした。この時シユニア八百メートルリレーに大会新記録を出しましたが惜しくもすぐには破られてしまいました。一年の最後の試合として行なわれたのは桐花中の試合でした。そこで十点ほどの差をつけて勝利を得、本校と桐花中とで共同で作った「優勝たて」を手に入れました。

それにしても四度目で勝つた事は大変進歩が早いと思います。通算五回の試合を体験し、陸上を始めて八ヶ月で、一人前のチームに成長したことは大変立派なことと思います。

去年を省みて反省しなければならぬ事がたくさんありますが、全員が力を合わせ、自分のため、五稜中学校のために大いに努力しようとして決意しております。我々は苦しい練習は恐れません。「苦しみのあとの楽しみ」これをもとめて前進しようと思います。

(金村照康)

## 陸上 部 (女)

私達陸上部が、本格的に練習しはじめたのは去年の春からです。練習と言ってもグラウンドが使用できないために、分じょう住宅地の所で細々とやっております。初めのうちは走ることのみであまり興味はわきませんでしたが、しかし投げけるにしても跳ぶにしても、とにかく走る事によって筋肉をきたえない事には、良い記録を生む事はできないことを知り、小川先生の言われるまま、血のにじむような練習を続けました。だが初めは砂場がなぐ堅い土の上で走高跳の練習し、骨を折る人もありました。先生方が手に豆を出しながら砂場を作って下さり、やっと本格的練習を始めた。何をやるにも、何もわかりませんでしたので雨の日も、風の日も、ときには薄暗くなる頃まで、ほとんど毎日猛練習を続けました。ついに私達の練習した成績をためす日がやってきました。桐花中との対校競技会の大会です。初めての試験なので全員あがつてしまい、わずかの差で負けてしまいました。しかし、私達の未知の力を初めて表わすことができ、自信を持つことができました。ついで中体連の大会です。五稜中は全市の注目の的でした。あざやかな青と黄のユニフォーム、自信にあふれ真黒い顔をした五稜生は実力以上の力をだして戦いました。しかし、三

年生のいない私達はすぐれた成績を残すことは、できませんでしたが、斉藤さん、佐藤さん、渡辺さん達はすばらしかったと思います。



風景 練習 陸上 部

又、放送陸上には、中体連以上を發揮したと思います。競技前に放送局の方がみえ斉藤さんの事について色々質問されておりました。競技会のシーズンも終わりの頃桐花中との秋の試合を行ない、全員一致協力し、ついに春の大会の雪辱を上げました。こうして過去一年間をふりかえってみて熱のこもった試合、練習ができたのもこの裏には先生方はじめ、皆さん方の御声援によるものと感謝いたしております。またクラブ員も良く努力したと思います。全員良きチームワークを持って、これからの五稜中学校のすぐれた伝統を築くために努力しております。

(坂本文子)

## バレー部 (男)

テストが多くなつてくると夜ふかしをする日が多くなつてくる。夜ふかしをするにも何をするにも、まずからだをじょうぶでなければならぬ。そこでからだをきたえ、かつスポーツに親しもうというので発足した我が五稜中学校のバレー部も約一年が過ぎた。部員は男子十二人全部二年でしめてゐる。一年生がいないのは、まだバレーボールというスポーツをよく知らず、これを舞うバレーと間違へているのではないだろうか。だからせつかく築いた基礎も一年でだめになつてしまわなうかという悩みがある。

最初発足した時はまだグラウンドもなく、今の分譲宅地のあたりで練習した。ユニホームはもちろんネットもなく、あったものはボールだけだった。御承知のとおり本校には三年生がいないので完全な練習ができず、顧問の先生も永谷先生一人で、なかなか手がまわらないというハンディキャップもあり、練習も真剣ではない時もあった。やつと真剣に練習するようになったのは、夏休みが終わって中体連の試合に出るといふ事を聞いてからであった。これには筆舌に尽せないほどの苦勞をしたが、クラブ員はそれを征服して練習をしたのだ。この頃からネットを張って練習することができるようになつたので、練習も

だいぶしやすくなつた。ネットを張って、さあ練習しようとしたら雨がふつてきたというようなこともたびたびあった。そんな調子で練習したので中体連の試合もチェンジコートをしたまではよかつたが、大鵬に対する佐田の山のようなわけにはいかず14点で勝負がついてしまった。むこうさんが強すぎたのである。そして三学期、待望の屋体もでき、やつと屋内での練習ができるようになった。練習の時は、みんな今年こそと張り切つてゐる。今年、一年から三年まで全部そろえて無敵の五稜のバレー部をめざしてゐるのである。また春とはいえないが、春の練習ももう始まつてゐる。今年はどうさぎ年、そして跳躍の年でもあるので優勝ということばをモットーにして歩いていきたい。

(藤田真司)

## バレー部 (女)

私達バレー部は、新校舎に移つてから、ようやく練習らしい練習が出来るようになり、先生方も暇を見つけては、練習をつけて下さつた。最初、用具もそろわない中で、私達はバスだけに夢中になつた、しかし、バスだけではだめだということを知り、他の用具もほしいと言ひ出した。先生方は、廃物を利用して色々工夫され、立派なコートを作つて下さつた。

「さあやるぞ」私達の心は、一つとなつてつらい練習に励んだ。むずかしいルールも次第に身につつき、バレーらしい練習が出来る様になつた。選手も正式に決まり、真夏の太陽の下で、一生懸命練習に励んだ。練習試合も何度か行なつた。その中でも本家の大川中に勝つた時は、「わずかに三ヶ月余りで、伝統ある学校を破つた。」という満足感でいっぱいでした。

九月八日、待ちに待つた中体連大会の日です。私達の相手は旭中学です。会場についた時、何とも落ちつかず、試合の前の練習もうわの空で思う様に出来ませんでした。初出場で、上つていたのでしよう。一セット目は、何とか戦えたのですが、やっぱり相手は一枚上でした。二セット目も、勝つことはできず、残念にもストレートで負けましたが決して、勝てない試合ではなかつたと思ひます。「私達には、来年があるんだ、来年こそは。」そう決心し、この試合を薬にして、来年のため、もう一度基礎から練習しようと思ひました。

今では、全市に誇る室内体育館もでき、不由なことは何一つありません。ただ、私達の団結と協力、そして、先生方の良き指導を得て、大いにがんばるつもりです。時々、気ぬけしてさぼつたりすることもありますが、「来年こそは」ということばを

思い出しては、苦しみに、絶えております。  
これからも、あのことばを忘れず、今年の優勝目ざして一生懸命練習に励み、がんばりたいと思います。  
(村岡千鶴子)

## 卓球部 (男)

振り返って見ますと、卓球部が発足してからは二年。初期の頃は、卓球部は名ばかりのもので、必要な道具すらありませんでした。

卓球の練習はクラス順に行ない。実際に部員がそろってフォームの練習を始めたのは、この一年間でした。

卓球を行なうために、かかせないラケット球、卓球台、ネットの中で、ラケット、は各人持ちで問題はありますが、卓球台が二台なので、男女共に別れて練習するという実状です。いくら練習したくても順番が来るまで待たなければならぬのが一番残念でした。大会が近づき、前半基本練習。後半試合練習という目標で、野々村先生、藤原先生等の指導のもとにルールや技術、かけひきなどを学びました。

根本の目標は

- 一、準備運動を必ず行なう事。
- 一、ボールを手で止めない事。
- 一、ラケットを決して床に置かない事。

一、台を遊ばせない事。

等をモントーとして斗志をもやして練習に励み、初めての中体連の大会に参加しました。しかし、結果は御存じの様に完敗でした。でも私達卓球部員は、この試合のおかげで、技術、かけ引き又雰囲気などを学びとる事ができましたが、まだくみくみであるという事も思い知らされました。でも他校の生徒は「来年の五稜中学は恐ろしいぞ。」といってくれましたので、うれいような、恥ずかしいような気がしました。本校では、私達二年生が最上級生なので、先輩の教えをこう事も出来ず、基礎を築き上げるといふ困難があります。下級生の教え方もわからないままにただ夢中で進んできたという現状を思い、大いに反省しております。

試合に着るユニフォームも出来ましたが、五稜中学の姉妹校である中央、的場、大川の伝統ある卓球部に劣らない様な、りっぱな卓球部を作り上げたいと部員一同斗志をもやしっております。  
(龍 正則)

## 卓球部 (女)

卓球部は、分校当時からありましたが、その当時のクラブは、卓球部台もなく、名ばかりのものでありました。昨年からは、台が二台入り、男女五十人ちかくの部員が、四人の

先生方から指導していただきました。昨年はまがりなりにも、他校と試合ができるようになりしました。

入部した当時私たち女子部員の大半は、ラケットの持ち方一つ知らず、何から何まで指導していただきましたが、皆それぞれ一生懸命でした。

中体連の一ヶ月位前から、朝は七時半まで登校し八時半まで練習、放課後は五時までの練習です。皆よほどねをあげていたが、それでも大会目ざしてはりきっていました。大会では、予選で失格しましたが、私たちに初めて出場する大会で、試合中のふんいきなどもなにもかもが初めてでした。しかし負けたとはいえ、私たちにとって大変良い経験でした。

今年こそはこれをいかしもっと練習して、それに度胸をもう少しつけて、立派に、悔いのない試合ができるようにと思っています。

私達部員も、もう少し計画的に、先生方にも頼らず自主的に練習して、よりよいクラブを築きあげていきたいと思います。

(小笠原美幸)



## クラスめぐり

一年A組、これが私たちのクラスである。教室は今まで玄関を入ってすぐの所にあつたが今は、保健室になつたために、通し教室だつた所に移つた。ところが移つた時、隣が特別教室になつていたので、板金工作をする音などがして頭が痛くなるほどであつた。しかし先生方も心配し〇組と入れかわりに移転してくれたので少し静かになつた。生徒数は五十三人で、男子が三十一名、女子が二十二名であり、八幡、千代田、柏野が主な出身校である。

担任の千葉先生は体が大きく、話し方はゆつくり、時々ニューモラスなことを言つて笑わせることがある。科学の先生で、行動の面は大変きびしい。とかく気のゆるみがちな私たちなので、時々注意をうけることによつて自己反省し、まちがつた行動をとらないように努めることができる。

### 1A — 協力精神が誇り —

クラスのみんなは入学した時、自分の出た学校の自慢をしあつたりしたものだが、最近はそのうけはしなくなつた。というのは、あと二カ月で二年だからだ。それにみんなも友達としてなれてしまつたし、クラスの雰囲気にもなれてしまつたからだ。

勉強というとおまわりでできる方ではないそうだ。(中にはできる人もいるけれど)でも教室に入ると明るく、さわやかな感じがする。というのは、教室にはずっと太陽が入つてとても暖かいからだ。それにクラスのみんなどは明るく純真な人ばかりだからだ。クラスには話好きの人、授業時間でもさざざいしている人などさまざま。でもそれだけに見ているとおもしろい。

私たちのクラスでは、今まで三人が転出し、やはり三人が転入してきたが、函館市内での転出、入は二人ぐらいである。たいていといっても四人だが、遠くへ行つたり、遠くから来たりしている。日直は二人ずつ。だが他のクラスとちがつて議長(副)会計、厚生部などは日直をしなくともいいのだ。というのは、これらの役員は朝いそがしいからだ。でも朝会のある日は、この中でも自ら進んで日直をする人もいる。

ホーム・ルームの時など一学期ころはすこく発言をする人がいたが、このころではあまり発言をする人も少なくなつた。

ところで私たちの教室は自習時間大変さわがしい。阿部先生が注意をしに来たこともあつた。だが近ごろでは少し静かになつてきた。隣のクラスと四、五センチの厚さしかない木でくざられてるので、うるさくすると大変ひびき迷惑がかかるからだ。それに時々注意をされるからだ。

だが、このさわがしさともあと少し、もうすぐ組替えなのだ。だからどの人といつしよになれるかわからない。もう少し静かな教室にしなくては。でもこの教室が好きだ。少しうるさくあまり勉強はできなくとも、すなおな心の人ばかりだからだ。このさわがしさだつてきつとよくなるはずだ。なぜかという協力精神はどのクラスにも負けない自信があるからだ。だからこの協力精神で私たちのクラスをよくしていかなければ。

二年になって組替えをしてもこの協力精神を忘れないと思う。いやけつして忘れないだろう。

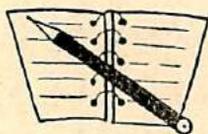


## IB — 動物園よりおもしろい —

私たちのクラスは一年B組。紫の落ち着いた色を旗の色にかかっているのに反し、そのにぎやかさ、さわがしさは学校随一かも知れない。なぜだろうかとふと考えてみることもある。人間の寄り集まりは実にさまざま、どこかと言って取り柄もないが、にぎやかで、明るく、お人好しのん気者が教室せましと顔を並べている。ある先生の評によれば、小さな子どもを連れて来たら、動物園よりも喜ばれるであろうとのこと。一人一人が個性的で自分をむき出しにしている。私たちは男子と女子がよすぎてしばしばけんかをするほど仲がよい。授業時間でも、わからない所があるとさつそくに、男・女かまわず聞いたり教えたりしている。遊び時間でも、放課後の時間でも遠慮もなく一緒に仲間にはいつて話し、たがいに遠慮もなく恥かしがりもなくふるまえる自由さが、この組をにぎやかにしているのだろう。席はサンドイッチ・三十一人の男子が中味になって、口やかましい女子にはさまれキニューキニューやられている。B組は女子の方が強いようである。休み時間になると、ストープを占領して我が物顔にしやべりまくっているのが女子で、男子は寒さのあまり教室のすみで、すもうでも取つてあつたまるよりほかないようである。そしてみんながちっともそんな不公平を気にしていない。感じが鈍いのかも知れない。私たちは時々おかしなことをしてかしては先生に叱言をもらう。叱られてはいる時のみんなの顔は真剣である。ほんとにこまったようにうなだれている者、ペそをかかればかりに先生の叱言を聞いている者、そのあとさつそく皆なで話し合つてなおそうとするのだが、いざ実行となると容易にできない。この前も皆なで朝の自習の計画をたててやり始めたが、すべり出しは好調だったが何日もか続かなかった。叱言をもら

えば、あわててやり出し、三日もたてばケロリと忘れて同じことをくり返している。でもこんなB組にもよい所はたくさんある。放課後の掃除に人手が足りなければ自分から手伝ってやる人かたくさんいるし、体の不自由な友だちのためにいろいろ気を使つて力をかしてやつたりしている。

駒ヶ岳の登山にも、スキー遠足にも、この友だちを連れて全員参加した。このことはB組にしか残らない大切な思い出である。また、運動会の時、陸上競技大会の時、結果は男、女共仲よくピリであったが、放課後や日曜日に出場者集まって研究し合いながら練習した努力は、B組ならばこそという自信をもっている。勉強も遊ぶ事よりは好きではないし、競技大会も思うようでないこのB組に、文化祭の弁論大会で堂々全校二位をとってくれた大石君の賞状とソフトボール大会で男子が二位をとった事が、少しばかりの面目をほどこしている。また、みんなから「おやじ」、「おやじ」と言われてクラスをがっちり支えている議長の大石君、それにとっても明かるく勉強もよくできる石畑さんをB組の代表にして仲よく愉快に毎日を過ごしている。この組がやがて別れ別れにすることが私には残念に思われる。



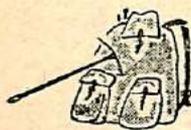
## IC —勉強よりスポーツが得意—

私たちのクラス一年C組について、ちょっと紹介したいと思います。少しさわがしくて、勉強の方も良いとは言えないが、五十四名の生徒が協力し合っています。担任は、赤黒く体格のいい見るからに、スポーツマンらしい感じの小川先生です。クラスには、

おもしろいことを言って、いつもみんなを笑わせる人、活発な人、短気な人、おとなしい人など、いろいろな性格の人がいますが、みんな、友達同志で宿題を忘れた人がいれば、教えてやるとか、勉強でわからないところがあれば、おたがいに教え合っています。試験の後には、必ず小川先生は、「何だ、この成績は。」と、みんなをしかります。そのことばで、みんなは急にしゅんとなります。前までは、朝学校へ来ると、みんなは廊下や教室で遊んでいましたが、二期期から英語や、数学の試験をやつて、自習を始めるようになりました。そのためか、熱心に勉強する人がふえてきました。まちがったときは、のこされて覚えるまで責任者もいっしょにやりますが、とても寒い日があつて、みんなオーバーを着ながらやつた事もありました。けれども苦労をしても、組全体ができるようになるのですから、協力し合つて、少しでも良い組にしなければならぬと思つてがんばっています。勉強時間の始めには、さわがしく、委員が注意しても、少しも静かにはなりません。先生が「ガラッ」と戸をあけたとたんに、教室の中は急に「シーン」と、なりま

す。特に数学の先生などはそうです。体育館ができるまでは、廊下や教室でさわいでいましたが、体育館が建つてから、男生徒はほとんどみんな、体育館で遊びます。みんな明るく、仲良く、遊びますが、「少し遊びすぎかなあ。」と思われほど、五時間目が始まるころには、汗びっしょりになつて

「フウ・フウ」言いながら教室に入つて来ます。時にはおもしろくないことや、けんかまではいかなくても、おたがいに、にくみ合つたりしたこともありましたが、C組は仲が良くてほがらかな組です。たとえば、A君とB君ですが、一人が先生にしかられたりすると一人が助けてやつたり、けんかをして負けそうになるとかせいでやつたり、どんな時でも、助け合っています。このように男子は男子、女子は女子で仲が良く協力し合っているのですが、男子と女子は、あまり協力していないようです。これが組の欠点だと思えます。「勉強はあまり得意でないが、スポーツならほかの組には、負けない。」という自信があります。勉強時間に小さくなっている人でも、体育の時間には、のびのびと運動しています。校内陸上競技大会の時には、何週間も前から、おそくまで残つて練習していました。その結果が大会に現われて、優勝できたのでしよう。この練習したがんばりを、勉強にも利用するようにし、男女がもう少し協力し合えば、五稜中の模範的な組になると思います。一年も終わりに近づいた今、二年生になると同時に、この組がばらばらになると思うとさびしくなる事もあります。でも、その前に、先生に「成績が良くなった。」と、一言でもほめていただいで、晴ればれた気持ちで進級できるように、あと一ヶ月と残り少ない日々を、一年生の最後として、悔いのないように、チームワークを今までよりもっと固いものにし、新たな気持ちで、勉強にのぞむようにしたいと思います。



## 1D —英語ができて男女の仲がよい—

五稜中学校というところ「ああ、すばらしい校舎だつてね。」とよ  
くいわれる。ぼく達はそこの一年D組のクラスメートだ。小学生

から中学生と肩書きが変わり、八幡・千代田・柏野の三  
校から集まったのである。クラスの半数以上は男子生  
はじめて登校した時は、お互いに初対面が多いし、担任  
の先生は、おっかなそうだし、やっぱり小学校の方が楽  
しかったなと少し心細く思った。しかしそれから十ヶ月  
もたった。中学生になって第一回目の運動会。皆、一人  
一人がよく頑張った。おかげで、ぼく達のクラスは学年  
で一位という好成績だった。先生は、努力と団結の力を  
ほめて下さった。それを勉強にもっていきなさいと、  
いわれた。皆も「ハイ」と返事したはずであったが、  
赤川遺足、駒ヶ岳登山など疲れた後の、ころよさは、  
全く言葉にあらわされないもので、友達の間が兄弟の様  
に親しくなったように思う。時々けんかもあるけれど、  
仲なおも早い。仲が良いからお互にわがままになつて

けんかになるのだと思う。しかし全体的にみて、明るい  
気持の合ったクラスである。つい先頃、スキー遠足があ  
った。皆張り切って、山に登った。しばらく雪が降らな  
いので固まっついて、少し氷がかかっていたけれど、勇  
敢にすべる人が多かった。僕のクラスでもYさんは女で  
も男に負けないフナイトで、もそもそしている僕達をつ  
きぬけ降っついていき、精力があまったのか思いきりはでに  
ころんでいた。皆も思わず「ハハハハ」と笑ってしまった。  
ただ僕達が折重なつてころんだ時は、反対に笑わ  
れるしまった。ホームルームの時間も木曜日は一

時間もあるので、色々議題を出し合うのだが、中には不まじめな  
人も居て、せっかく活発に意見を述べているのに勝手にこそそ

話し合っていたり、ヤジをとばしてひやかしたりする。この点は  
クラスとして、皆で気をつけていかなければならないことだと思  
う。今度意見を言葉で言わず、投票箱の様なものを作って、れそぞ  
れ名前も書いて入れることにした。これならあまり発言しない人  
の意見もわかっていいことだと思う。D組の担任が英語の先生で  
あるせいか、僕もそうだし、皆も英語の勉強には大分力が入るよ  
うだ。だから学年として、英語の成績は、割合いいのではないか  
と思う。しかし先生からはどの科目もかたよらず勉強するように  
と、いわれているのでそのつもりでやっている。

学課の中で男の先生の時間と、女の先生の時間で、クラスの空  
気がずいぶん違うようだ。女の先生の時間には、こそそ話し合  
ったりする男生徒がいて、この間は、先生もとうとうおこってし  
まった。そうかと思うと別の科目の時間には、いつも元気な連中  
が声一つたてず何の質問をされても返事も出来なかつたりして、  
僕もヒヤ／＼したことがあった。

三学期は短かい。あと一ヶ月位で二年生になるのだ。学年末のテ  
ストに皆も全力あげて勉強している。テストが終わった時は本当  
にすがすがしい気持になり、お互いにはがらかになる。校舎の増  
築もだんだん出来てきたし、四月には新入生がきつと僕等と同じ  
様な気持でこの学校の門をくぐってくるだろう。きれいな体育館  
での終業式や入学式、きつと感激するだろう。二年生になるとク  
ラスは組かえのためにバラバラになる。少しさびしいが「一年D  
組」という皆の名前はいつまでも残るだろう。おとなしそうで、  
茶目気のあるD組、これからも明るく元気よく勉強し合つて行き  
たいと思っている。



## IE — 親切で思いやりがある —

残雪をいただく横津連山から吹きおろす風は、ほほを刺すように冷たい。だが僕たちの入学を祝うかのように、空はどこまでも青くすみきっていた。十分程前に学校に着いたが、もうほとんど友だちが登校しており、そここに一団となつて話し合つていた。その顔からは、学校生活の第二段階に進む喜びと不安が感じとれた。定刻、一Eの教室に集まるよう指示を受けた。

まもなくして先生が来られ、父兄に一礼後、中学生としての心構えや、注意事項を話されたが、声の大きいのにまずびっくりした。話しぶりも小学校の先生とちがい小学校時代のようなあまい気持ちでは駄目だと思つた。みんな先生の一語一語を聞きもらすまいと真けんな面持ちである。僕は、この時「なる程。時間は有効に使わなければならぬ。ぜひ、このことは守つていこう」と、心に誓つた。翌日からはいよいよ授業が始まる。先生が入つて来た。仮議長のA君が「起立」と号令をかけた。この時、緊張の空気が教室いっぱいにあふれ、中学生になつたのだという実感がわいてきた。目新しいこと連続だったが、なかでも各教科ごとに、専門の先生がおられ当然習うことも小学生時代と比べて深く、時間の使い方のみならずも加わつて、毎日毎日が追いかけるようだ。やがて運動会がやつてきた。この日も入学式当日と同様、非常によい天気で初夏の陽を一杯に浴び、初めて自分たちの校庭で、運動会を楽しむことができた。ダルマ、旗などを作つての応援もむなく、男女総合で四位であった。秋のソフトボール大会、校内陸上競技大会でも女子が陸上で三位に入っただけである。みんな運動が好きだが、どうも勝てない。秋の駒ヶ岳登山の時は、お互いに助け合い全員が頂上をきわめることができた。頂上では、食物を分け合ったが、その

時の楽しい思い出は今なお忘れることができない。僕たちのクラスでは入学以来、学級日誌をつけ毎日の反省、また週に一度H・Rの時間での反省にも議長が読み、一日、一週間の反省をする。そのほか決議してもらいたいことや、いろいろな議題を出し合い討議するのだが当初はなかなか良い議題が出ず、たいていは「後の者がいたずらをする。」とか「誰々さんが、私の悪口をい

た。」と、いったたくいのが多かったが、二学期頃から私たちが議長を中心とし、H・Rの運運も軌道に乗りはじめ、建設的な意見が出るようになった。昼食時には「いただきます」と号令をかけてから食べるのだが、みんなが席になかなかつかないのでもだまつていると、しびれをきらして「早くしれや。」「腹ペコペコなんだからなあ。」とか「先に食べちゃうぞ。」と、いろいろなことごとび出す。このように言いたいことや、思つていふことを、すなおに言うこのクラスの友だちは、とてもつき合ひやすい。またクラスには、なかなかのユーモリストがいる。この前もB君が、牛乳ビン落して割ると、C君が「あーあ、これでまたガラス工場がもうかった。」といつてみんなを笑わせた。僕はこの時、C君は思いやりのある人だなあと思つた。またこの時、世話ずきのD君が、チョコチョコと出て来て、ニタツと笑つてガラスくずをはき取つて行つた。こういう親切な人や、思いやりのある人たちが、たくさんいる。僕たちは少し大人っぽい、まだ子供っぽい。正直で伸び伸びして、みんなスタスタと身心共に伸び続けている。少し伸び伸びし過ぎて、ちよつとばかりしまりのないのが短所だが、とても良い仲間たちである。これからも、今までの経験を生かし僕らで考え合ひ、話し合ひ、僕らの力でできることは、みんなで力を合わせ、一人一人の長所を生かし、明るく良いクラスになるよう励むつもりである。



私たち二年A組は一口に言ってなんの取りえもない平凡なクラスだと思ふ。しかし平凡とはいえ、友情の花も聞く楽しいホームルームである。先に取りえがないと言ってしまったが、学校中に自慢できることもある。それは全校一、男生徒と女生徒が仲のよいことである。したがって、クラス全体が暖かい雰囲気の中で生活している。

## 2A —平凡だが友情に満ちて—

新学期このクラスが編成された頃は、西谷先生も言っておられたが、一人一人がすましていた。とくに男生徒と女生徒同志はどうなることだろう、円満にクラスがまとまるだろうか、内心心配しておられたそうである。此頃のように楽しくなごやかな雰囲気になったのは、先生の御指導と級友全員の協力によるものと思う。このクラスの気風はどこに出しても恥かしいものではない。しかし運動の面では前のものに比較して、正直なところ一寸勝手がちがう。これを挽回するのがこれからの大きな課題といえる。この弱点がはっきりあらわれたのはソフトボール大会、運動会、陸上競技大会のときであった。

ソフトボール大会の時、男生徒の練習は毎日五稜郭公園で汗まみれになってやっていたのに、その努力もむなしく、惜しくもF組にやぶれてしまった。これは女生徒とでも同じであった。陸上競技会ときはクラスに高跳の金村君、マラソンの黒川君、そしてハードルの藤井君など優秀な選手がいるのにもかかわらず、総合点で入賞できなかった。でもクラスの人たちはさっぱりしたもので「負けられる組がないからA組がなってやったんだ。」と、軽く言い流していたが、こんなにあっさりした面が、A組の長所といえるのではないだろうか。ではこれからA組のホームルームの時間を

少しご紹介しておこう。

「エーこれからホームルームを行ないます。」と、きまり文句から始まります。議題は先週からのもので、「なぜホームルームに意見が出ないか。」ということである。一週間考えた結果を今日発表するのである。

座席の順に「A君はどう考えますか。」との議長の質問に「ぼくは恥かしくて発表しないんだと思います。」と答えた。このようにクラス全員の意見を参考にいろいろな事を解決して行く。そうしてこの時にまとまった結論は

一、人の意見と自分の意見とのちがいを考えて討議する。  
一、聞く人も発言する人も感情的にならない。

今では、誰もが自分の意見を自由に発表できるようになったと思う。

又私たちの座席の決め方は、どこの学級にもないくじ引きで決めている。これは先生が考案されたもので、二週間毎に必ずやることにしている。その方法は全員に自分の名を書いたカードを提出させ、代表の人が、男女一枚ずつ同時に取り、名前の合った人が隣席にすわるのである。その理由はクラス全体が楽しく接することのできるように、というのだそう。

私たちはクラス全員をより仲良く、より団結するよう努力するとともに、学校全体に明るい、暖かい、そして折り目正しい校風を作ろうと考えている。



私たちのクラスB組が、毎日どのように生活し、またどんなクラスであるか紹介したいと思います。

人間は十人十色といわれるように、私たちのクラスも、愉快な人、短気な人、活発な人とさまざまですが、どちらかといえば、明かるくにぎやかなクラスです。授業時間も自然と楽しいものになっています。

朝、教室に入ると男子はいつもストープの回りを取り囲み、女子はあちこちにかたままって、ベチャクチャとおしゃべりをしています。ベルが鳴ると、みんな席に着いて授業の用意をし、先生のいらつしやるのを待ちます。

その日によっては、話の続きをしていて、すぐ席に着かない人もいますが、そんな時は、注意すると、すぐ席に着いてくれます。これは、クラスのみんなが素直だからだと思います。ここで私たちのクラスの人が素直だという事についてお話しします。

ある教科の時間になると、とてもさわがしかったのですが、一度注意をうけたら、今までのさわがしさがうそのように静かになりました。またあるH・Rの時間「授業中勝手に席をかえているのでやめてほしい。」という発言がありました。その発言があった次の日からは、一人も勝手に席をかえる人がいなくなりました。

授業時間におもしろいことを言ってみんなを笑わせる人は二・三人います。この人たちは急に人間ばなれした声を出したり、他人のことかまわず大きな声を出したり、クラスで一番おもしろい人たちです。また、この人たちはニツクネームをつけるのがとても上手でクラスの半分くらいの人についています。その一部を紹介しようと、ヒットラー、むじなすずめ、というようにその人にぴったりでとても愉快です。私たちのクラス

はニツクネームがついていることによって、クラスを一段と明るくしていると思います。また、授業終わりのベルが鳴ると、反射作用でサツと本を閉じてしまう人もいます。

休み時間になると女子は待つていましたとばかりにストープのまわりを取り囲みます。前には、休み時間になるとみんな熱心に本を読んだこともありましたが、このごろは、ストープの回りに集っておしゃべりをします。みんなおもしろい人たちなので笑い出すととまらなくなるほどおもしろいことがあり、休み時間は、私たちにとって楽しい時です。

私たちのH・Rの時間は意見がないといえば全然なく、あるといえば議長や書記がまとめるのに困るくらいある時があります。また、休みが終わったあとのH・Rの時間には、各自が休み中にどんな生活をしたか話し合いました。私たちのクラスだけ特別おこなっている事を紹介しましょう。それは、みんなノートをもうけて、一週間の記録をつけているということです。これは運動会の時もらったノートを使って書いたのが始まりで、その時からずっと今まで続けています。ノートに書くことはその一週間に感じたことなどです。あと残り少ない二年生の生活を楽しくしていくため、クラスみんなが力を合わせてやっていきたいと思っています。

## 2B — 明かるく楽しいクラス —



2C — 目が黒板と一直線 —

僕たちのクラスは二年C組、担任の先生は菅原先生です。一口に言ってしまうと、騒がしい。朝、学校へ来ると、一部の人がストロブの回りに集まって話をしているのです。そして、ベルが鳴っても席につきません。担任の先生が来ると、「先生が来た！」と言う声で、立っている人はいっせいに席につきます。今まで騒がしかったのが、急に静かになるのできみわるくなります。これにくらべると、ホーム・ルームの時間は、真夜中のように静かです。もちろん、意見を言う人は一人もいません。議長は言いつくして、もじもじしています。しまいに先生が「これでは、ホーム・ルームになりません。やめよう。」と言う事になります。ほんとうに、僕たちのクラスは発言がたまりません。これが、朝と反対だったらどんなに良かったかしれません。勉強面では、一月二十八日の月例テストで、英語があまりにも悪かったので、ホーム・ルームの時間、議題がなかったら、英語の勉強をすることになりました。A・B・C、と分けてする事になりました。僕はこの考えに大賛成です。というのは、英語のわからない人が、わかる人といっしょに勉強をしたって、わからない人はやっぱりわからないのですから、基礎からやったほうが、その人自身にもよくわかると思います。運動面では、ソフトボール大会で男子が二位でした。チーム・ワークがとてよかったので、決勝で優勝すると僕は思っていました。その考えが悪くまけてしまった。みんな、できるだけ戦ったのに、くやしかった。なんだかしらないうちに涙が出て来た。みんなに知られるのが恥ずかしかったので、手で涙をとった。この思い出は、僕の心からけつしてはなれる事はないだろう。前に書いたように、勉強時間は悪い事ばかりではない。みんなの目が、黒板と一直線になって

いる事がよくわかる。それにみんなと気がるに話す事ができる。この二つは特に大切だと思う。弁当の時間が近くなると、時計を保持している半数の人は時計を見はじめ。カネが鳴ると、「ワー」と声を出す人もいる。僕もこの時間が一番好きだ。顔は、みんなほほえんでいる。手を洗って席に着く。担任の先生が来て、「いただきます。」と言う。みんな、一せいに弁当を食べはじめ。昼食の時間は二十分間、あつというまに、終わってしまう。みんなの顔はごきげんだ。休み時間が来ると、女子は本を読んだり、勉強をしたしているが、男子のほとんどは運動場に遊びに行きます。僕たちのクラスは女子の方が男子より、よくできます。ですから、勉強時間に答えるのはほとんど女子です。他のクラスは、男子の方ができると聞いています。僕もそのほうがよいと思います。男子だってもう少し勉強すれば、女子なんかすぐ追いこせると思います。こういう競走があればあるほど、僕たちのクラスは今よりもっと良くなると思います。実際に、僕たちのクラスが、良い方へ向かって向上しているのは確かだと思えます。



## 2D — 特にスポーツが優秀 —

私たち五十一人は団結して毎日楽しい生活を送っています。朝いつものように、「おはよう、く。」「オース。」と口々にあいさつをかわしながら、みんな元氣良く教室へ入って来ます。この威勢の良い一声でこの一日が始まります。あちこちでテレビや映画や勉強などについて、話はずんでいきます。でも、いつもこうではありません。なまけ者のA君、B君も、勉強嫌いな、C君などもみんな本、ノートにかじりついて勉強しています。遅刻寸前に入ってきたDさんも、みんなの勉強ぶりにおどろき、あわてて本を開くのです。先生の足音がすると、今までおしゃべりをしていた人も、立っていた人も席に着き、いままでの動物園のような騒ぎがどこへ行ったのか、急に静かになります。これと同時に先生が現われてその時間が始まります。どんな質問をされるかわからないし、答えられないと、立たなければならぬので、みんな真剣に先生の話を耳を傾けています。これはみんなの苦手な英語の時間です。でも好きな勉強はと質問されると「体育」と一勢に答えるほど、スポーツの得意な学級です。というのは、体育の先生が大変おもしろく、愉快にこの時間を過ごすからかもしれないが、それよりも、運動会で総合第一位、校内陸上競技大会でも総合第一位、ソフトボール大会は男子一位で女子は二位という優秀な成績を残しているからだと思えます。これはみんなの協力・団結のおかげです。

では、勉強はどうかと言うと一学期や二学期の初めの頃は、全体の平均があまり良くなかった。「スポーツばかり得意で、勉強が不得意なら困る。」「スポーツが出来るのだから勉強もスポーツ同様にやらなければいけない。」などという先生から注意を受けたせいか二学期の終わり頃から、成績が上がった人も多く

なりました。だから先生も「少し説教をしたせいかな。」と笑っていました。

このほかまだ長所が沢山あるのに対して短所もあります。それは、先生によつて、あの先生はやさしい、この先生はこわいなどと差別をすることです。やさしい先生の場合は、おこらないからと思ひ授業中も立って歩いたり、おしゃべりをすることが二、三人いるのです。だから授業が始まっても落ち着かないことが何回かあります。他の学級では少しは差別をしても私たちの学級ほどではないでしょう。

私たちのH・Rは、意見を出す人が決まっていますあまり活発には進行しません。それから、議題のない時などは、レクリエーションをやつて、みんな外に出て、いろいろな遊びをしたり、童謡や歌謡曲などを歌い合います。また、担任の松井先生は、このH・Rの時間を利用して、私たちの最大の問題の進学や就職、将来のように、進んでいったら良いのか、くわしく話してください、やさしく理解のある先生です。

勉強、スポーツ共に優秀で、男女仲が良く、団結力の固い私たちの長所をいつまでも持ち続けて、みんな協力して立派な学級に築きあげていきたいと思えます。



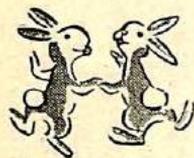
ぼくたち、二年E組は名の通りイー組である。明るくて、スポーツも勉強も優秀な方である。E組のことを月曜日の一時間目から順に紹介しよう。

## 2E — 勉強もスポーツもイ—組—

朝会が終わって、一時間目は、数学で藤原先生である。始まってすぐは、みんな身が入らず、おしゃべりをしたりしているが、だんだんまじめになってくる。みんな活発で先生を困らせることがある。だんだん授業が終わりに近づいてくると、皆あきてきて、時間を聞いたり、おしゃべりを始める。ベルが鳴ると皆いっせいに道具をしまし、休み時間になると、ストープの回りに集まる人、次の時間の用意をする人、教室を走り回る人色々だ。二時間目のベルが鳴る、国語で平沼先生。この先生は、すごく面白い。授業中にしゃべりを言ったりして、みんなを笑わせている。二、三人おどけてみんなが笑っても先生はむっつりしている。それでもみんな国語の時間が楽しいらしい。次は理科で、ぼくたちの担任の先生で石塚先生、石塚先生はあまり注意をしないので、二、三人がおしゃべりをした。先生は、ぼくたちに一生懸命教えてくれる。

次は社会、西谷先生でベルが鳴ると待ってましたというようにすぐ来る。先生は、「E組は明るい人ばかりで面白いな。」などと言って、授業を始める。黒板に書いては消し書いては消す。みんな先生が書くのを一生懸命ノートに写しているが、それでもおしゃべりは止まらな。それで、先生が質問するとみんな下を向いてしら顔する。すると先生は「いらぬ時にしゃべって先生が質問しても絶対に言わない。」と言う。ここがぼくたちの組の欠点である。四時間目が終わると弁当である。みんないっせいに手を洗いに行く。ぼくたちの組の弁当の時間は、授業時間と比べる

とすごく静かだ。弁当を食べ終わると、ベルが鳴らないうちにまた、おしゃべりが始まる。本当にこの組はおしゃべりが多いと思う。ベルが鳴ると運動場に出る人や、外に出て遊ぶ人がたくさんいる。だが女生徒の大部分は教室に残って、ストープの回りでおしゃべりを始める。昼休みが終わると今度は音楽である。みんな本を持って音楽室に行く、音楽の先生は女の先生なので、いたずらをしたり、ふざけたりしている。男生徒などは、騒ぐ時は大声を出す。歌を歌う時などは、みみずの鳴くような声である。この次は英語なので、英語の本を音楽室に持って来て、勉強している人もいる。英語の時間になると、みんなは、「ああ英語か。」とがっかりしたように言う。英語の野々村先生はきびしいので、この時間だけはみんな緊張している。先生は一人一人問題を当てて、わからなければ立たせるのである。たまに先生がじょうだんを言うのでまた笑い出す。ベルが鳴るとみんなホットした顔になる。ぼくたちの組の欠点は、勉強時間におしゃべりが多いことと、ホーム・ルームの時に発言が少ない事だと思ふ。この点をなおして行けば、E組はもっとイー組になるだろう。



## 2F — 男はテレヤ女はオテンバで仲がよい —

二年の最初クラスが変わり、新しく二年F組が誕生した。F組の特徴を長所と短所に分けて紹介しよう。

長所としてまず第一に、男女仲が、良いということである。まだ名前も知らない時から、席が男女交互だったせいとか今では机がくっついても、けんかをする者はめずらしい。いつも男女が楽しそうに親しそうに話し合っている。忘れものなどをした時は隣りの人から借りている。

しかし、男子の中にはテレヤが多い。そして女生徒の方は、なかなかおてんばが多い。そのためか、スポーツも得意中の得意だ。勉強時間も、体育ともなれば、みんな笑顔になり活発にやる。運動会、ソフトボール大会、陸上競技大会、いずれも良い成績をおさめている。特に女子のソフトボール大会の時は印象的であった。第一回目B組と戦い、最初の緊張にもかかわらず、試合はF組の勝利に終わった。

次は、A組とぶつかった。これはなかなかの接戦だった。しかしそれにもかかわらず、またもF組が勝った。

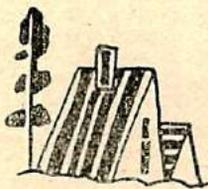
最後決勝の時は、D組とであった。D組はやはり準決勝で勝ちぬいたクラスだけあって強かった。一回戦、二回戦、DF共に同点だった。最後どんだん打たれ「F組はもうだめだな」と思われた。この裏自信を失いかけていた私たちは、最後の力をふりしぼって、試合にのぞんだ。一点、またも一点、D組との差は、だんだん少なくなっていく。そしてわずかの差でF組は勝った。私たちはみな顔をほころばせ、おどり上って喜んだ。この試合の結果男子三位、女子一位というみごとな成績をおさめた。

それからもう一つの特徴は、クラスの中がユーモアに

富んでおもしろいことだ。

クラス内では、いつも笑いが絶えない。特にその中でも、Aさんは笑いの女王様である。身長普通、体重太りぎみ、遊びの発明者は、Aさんは、ある昼休み時間このような遊びを発明した。それはガラスに鼻をおしつけて、顔を見せあう遊びだ。自分たちの顔は見る事ができない。他人の顔を見てはゲラゲラ笑っている。このようにして笑わせるのがAさんだ。しかし授業中の態度は、なかなか立派でまじめな人だ。しかし、このような長所ばかりとは限らない、短所もけっこうある。

まず第一の短所は、何といってもH・Rの時、発言者が少いことだ。発言する人とならない人の差は非常に多い。平沼先生も時々私たちにこんな注意を下さる。「H・Rなどの時に発言の練習をしておかないと、大きくなって自分の言おうと思うことも満足に言えなくなるぞ、そうならないよう今から練習が必要だ。」といって私たちを心配して下さる。しかし、このようなことも、何度もH・Rを行なっているうちに次第になおってくるだろう。この他の短所も、だんだんとなくし、長所をのぼして、より良いクラスにしていきたいと思う。



わずか二十名足らずの先生方がいらつしやる職員室だが、教材教具、雑多な事務用品で、休み時間ともなれば身動きもできない。入口には、巨休を窮屈そうにすに乗っけているT先生。ハイごめんよ、と細い身を小さくして通り抜け、F先生とストーブの間を、アタロバットのような態勢でようようくぐり抜け、自分の座席にたどり着きホッと一ぶく。ああ疲れた。

悪い事して呼ばれて、有難いお話をいたゞいている生徒も、身の置き所なく、机の下でごみとにらめっこ。せつかくのお話も、頭の上を素通りらしく、いつも同じ連中だ。

用件のある生徒も、目的地にたどり着くまで一苦労。来る客ともなれば、給仕さん、いすを持ってあつちへウロウロ。こつちへウロウロ。まあ、これも新しい職員室が出来

るまで、しばらくの御しんぼう。

職員室内で一番目立つのがA先生。あまり大きくはないが、持ち前の地声と、ニューモアでいつもまわりに笑い声が絶えない。

いつも忙がしそうに動き回っているファイイトに満ちたO先生はいすを占領されて、立ってたばこを喫っている。七難八苦をさすかっつたような顔で、一生懸命答案を採点しているX先生。あまり目もよくないのに、机にかきのようにしがみついて、細かな字でノートに何やら書き込んでいるY先生。

風呂桶のような茶碗で、お茶をガブガブ飲んでるZ先生。金魚のあぶくのように、口からバクバク白い煙を吐きながら、宙をにらんで何やら考えているQ先生。

それらを意地悪そうに見て、これを書いているこの先生。

日直の先生は、腕章のついた腕を重もそうに、前日宿直の先生は眠むそうに、次の授業の準備をしている。給仕さんだけが、変わらぬ足どりで室内を歩き回っている。

おや、電話だ。「はいはい、もしもし、何ですか。よく聞こえますが、(また廊下で騒いでいる者がいるな。)え、こちら五稜中学校ですよ。病院じゃありませんよ。(チエ)」「こら、誰だ。廊下で騒いでいるのは、またお前か。鐘が鳴るまで、そこに座っている。(全く世話がやける。)」

あれ、教室の窓から顔を出しているぞ。あれは、○○だな。おや鏡を出したぞ。あはア、照らしていたずらしてらんだな。(よし取り上げてやる。ちゃんと職員室から見えるんだぞ。)全く、おちついて原稿を書いている暇もないよ。(まずい原稿になったのはそのせいでぞ。)

「ドカン! ガタン!」何だいあれは? お茶の中へ、天井から白い粉が落ちて来たぞ。増築工事の音か。すごいな。頭へ来るよ。やれやれ……………」

「何だ、何の用だ。なに、パンのお金忘れて来たから貸してくれ? はら三十円忘れないように注意しろよ。」

「君は? 宿題忘れて休み時間職員室に来るように言われたって、ああそうだったな、次の休み時間に来てくれ。」

ああ、もうベルが鳴ってしまった。次の授業は…………と、○組か。テストだったな、紙を持って職員室を出よう。(全くシヨックイン室だね。)



- 4月2日 始業式・開校式・7教諭着任式
- 4月6日 入学式
- 4月7日 対面式
- 4月16日 学級写真撮影(身分証明写真)
- 4月25日 内科検診
- 4月27日 歯科検診
- 4月30日 2年前期学級委員任命式
- 5月1日 1年前期学級委員任命式
- 5月8日 春季遠足(赤川水源池)
- 5月14日 眼科検診、生徒会立候補ノ切
- 5月16日 生徒会立会演説会
- 5月19日 生徒会役員選挙投票、即日開票
- 5月21日 生徒会役員任命式
- 5月23日 レントゲン間接撮影
- 6月8日 耳鼻科検診
- 6月12日 第2回大運動会
- 6月26日 1年知能検査、ツ反応接種
- 7月9日 腸バラ予防注射
- 7月11日 全国学力調査
- 7月13日 全市中学校生徒協議会
- 7月16日 体育館建設くい打ち始まる
- 7月22日 中体連競技大会始まる
- 7月24日 終業式

## 1年のあゆみ

- 8月20日 第2学期始業式
- 9月11日 写生遠足
- 9月24日 秋季遠足
- 10月19日 第1回文化祭始まる
- 11月5日 生徒会後期役員任命式
- 11月19日 地区別懇談会始まる
- 11月20日 インフルエンザ予防接種
- 12月19日 新校舎移転記念行事
- 12月22日 校外班会議
- 12月24日 第2学期終業式
- 12月26日 体育館工事検定
- 1月1日 職員新年交礼会
- 1月19日 第3学期始業式
- 2月1日 冬季遠足実施
- 2月7日 標準学力テスト実施
- 2月28日 体育館新築記念球技会
- 3月23日 修了式

# ―生徒看護日誌から―

月

主な目標

- ・校内生活のきまりをしつかり覚えよう。
- ・校舎の使用に気をつけよう。

四月

- ・看護生に協力し、明るい生活をしよう。
- ・教室や廊下で遊ばない。

五月

- ・校舎をきれいにしよう。特に土足は絶対しない。
- ・遅刻をしないよう。

六月

- ・規律ある校内生活をしよう。特に時間を守ろう。
- ・礼儀作法に気をつけよう。
- ・特にことばづかいをていねいにしよう。

七月

- ・中学生らしい態度をしよう。
- ・特に服装をきちんとしよう。
- ・学習態度をきちんとしよう。

八月

- ・きちんとした学習環境をつくらう。
- ・特に朝の自習をれい行しよう。

九月

- ・校舎の使い方に気をつけよう。
- ・特に、通し教室で乱暴な遊びをしない。
- ・ベルと同時に学習をはじめよう。

十月

- ・上ばき下ばきの区別をはっきりしよう。
- ・規律ある生活をしよう。
- ・学習に身を入れよう。
- ・服装をきちんと整えよう。

十一月

- ・朝の自習態度を身につけよう。
- ・火気の取り扱いに十分気をつけよう。
- ・乱暴な遊びは絶対やめよう。

## 昭和三十七年度生徒会役員

役名	前期	後期
会長	渡利三郎	又坂常人
副会長	小田晴久	金村照康
書記	石川律子	乙川絹子
書記	森孝男	花岡英俊
會計	辻由紀子	齋藤真佐子
	花岡英俊	



